本庄市遺跡調査会報告書　第24集

真鏡寺後遺跡Ⅳ

しんきょうじうしろいせき

－Ｇ地点（真鏡寺館跡）の調査－

２００９

本庄市遺跡調査会

序

埼玉県の北部に位置する本庄市は、南は秩父の山々より連なる上武山地から、北は群馬県との県境である利根川まで、起伏のある変化に富んだ地形と豊かな自然環境に恵まれた地域であります。当地の繁栄ぶりは、古く有史以前に遡ることが確認されており、市内には先人達の生活の痕跡である埋蔵文化財包蔵地が500箇所以上も所在し、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られています。

本書は、平成４年に住宅供給協同組合の建売分譲住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として実施した、本庄市児玉町塩谷に所在する真鏡寺後遺跡(Ｇ地点)の発掘調査の成果を記録したものです。この真鏡寺後遺跡は、縄文時代から平安時代の集落跡とともに、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した児玉党塩谷氏の居館と推測される真鏡寺館跡を含んでおり、今回報告するＧ地点はその館跡の中に位置しています。調査範囲が狭いながらも、館の内部を区画する規模の大きな堀が検出され、この館跡の構造や性格を考える上で新たな知見を得ることができたことは、大きな成果と言えるでしょう。

本書が、学術研究の基礎資料としてはもとより、郷土に残る文化財の保護や遺跡を理解するための一助として、多くの方々に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りました住宅供給協同組合をはじめ、ご教示やご協力いただきました皆様に、心から感謝申し上げます。

平成21年　４月　30日

本庄市遺跡調査会
会長　茂木　孝彦

例　　言

１．　本書は、埼玉県本庄市児玉町塩谷字真鏡寺85-2、85-9に所在する、真鏡寺後遺跡Ｇ地点の発掘調査報告書である。

２．　発掘調査は、住宅供給協同組合の建売分譲住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、平成４年４月６日から５月20日の期間に実施した。

３．　発掘調査は、業務委託を受けた旧児玉町遺跡調査会が実施し、その調査担当には徳山寿樹があたった。

４．　発掘調査から本書刊行に至る経費は、すべて住宅供給協同組合が負担した。

５．　本書の執筆及び編集は、恋河内昭彦が行った。

６．　本書で使用した地図は、国土地理院発行の五万分の一（平成２年）・二万五千分の一（平成５年）と、旧児玉町発行の二千五百分の一（平成９・10年）である。

７．　第４図中のＸＹ座標値は、世界測地系による新座標値で、カッコ内の数値は調査当時の旧座標値である。また、報告書抄録中の北緯・東経は、世界測地系による新座標値を換算したものである。

８．　本書に掲載した出土遺物の実測図は、新井嘉人と恋河内が作成した。

９．　本書で使用した写真は、遺構を調査担当者が、遺物を恋河内が撮影した。

10.　報告書を作成するにあたり、住居番号をＡ地点からの通し番号と整合させたため、以下のとおりＧ地点の住居番号を変更した。

旧　番　号	新　番　号
第１号住居跡	第53号住居跡

11.　本書中の遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。
　Ａ－法量、Ｂ－成形、Ｃ－整形・調整、Ｄ－胎土、Ｅ－色調、Ｆ－残存度、Ｇ－備考、
　Ｈ－出土位置、

12.　発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご教示・ご協力を賜った。記して感謝します。
赤熊　浩一、浅野　晴樹、荒川　正夫、大谷　　徹、金子　彰男、小林　康幸、駒宮　史朗、
坂本　和俊、篠崎　　潔、外尾　常人、田中　広明、田村　　誠、富田　和夫、鳥羽　政之、
中沢　良一、長滝　歳康、中村　倉司、根岸　春雄、丸山　　修、宮本　直樹、矢内　　勲、
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

真鏡寺後遺跡Ｇ地点発掘調査組織

旧児玉町遺跡調査会（平成４年度）

会　長	冨丘　文雄	児玉町教育委員会教育長
理　事	田島　三郎	児玉町文化財保護審議委員長
	清水　守雄	児玉町文化財保護審議副委員長
	武内　和雄	児玉町文化財保護審議委員
	野口　敏雄	〃
	小島　和子	〃
	永尾　憲司	児玉町総務課長
	高橋　　寛	〃　産業課長
	山口　雄朗	〃　土地改良課長
	木村　和雄	〃　土木課長
	塚越　政次	〃　都市計画課長
	井上　英夫	児玉町教育委員会社会教育課長
監　事	安久沢　一	児玉町企画財政課長
幹　事	吉川　敏男	児玉町教育委員会社会教育課長補佐
	岩上　高男	〃　社会教育課長補佐
	清水　　満	〃　社会教育係長
	鈴木　徳雄	〃　社会教育係主任
	田島　賢二	〃　社会教育係主任
	渋谷　路子	〃　社会教育係主事
	恋河内昭彦	〃　社会教育係主事
	徳山　寿樹	〃　社会教育係主事（調査担当）

真鏡寺後遺跡Ｇ地点整理・報告書刊行組織

本庄市遺跡調査会（平成21年度）

会　長	茂木　孝彦	本庄市教育委員会教育長
理　事	清水　守雄	本庄市文化財保護審議委員
	佐々木幹雄	〃
	腰塚　　修	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監　事	八木　　茂	本庄市監査委員事務局長
	福井　謙次	〃　会計課長
幹　事	儘田　英夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木　徳雄	〃　課長補佐兼文化財保護係長
	太田　博之	〃　埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃　埋蔵文化財係主査
	大熊　季広	〃　埋蔵文化財係主査
	松澤　浩一	〃　埋蔵文化財係主任
	松本　　完	〃　埋蔵文化財係主任
	的野　善行	〃　臨時職員

目　　次

序

例　言

目　次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第Ⅲ章　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第１節　竪穴式住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第２節　土　　坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第３節　溝　　跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第４節　調査区内及びその他の出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・ 19

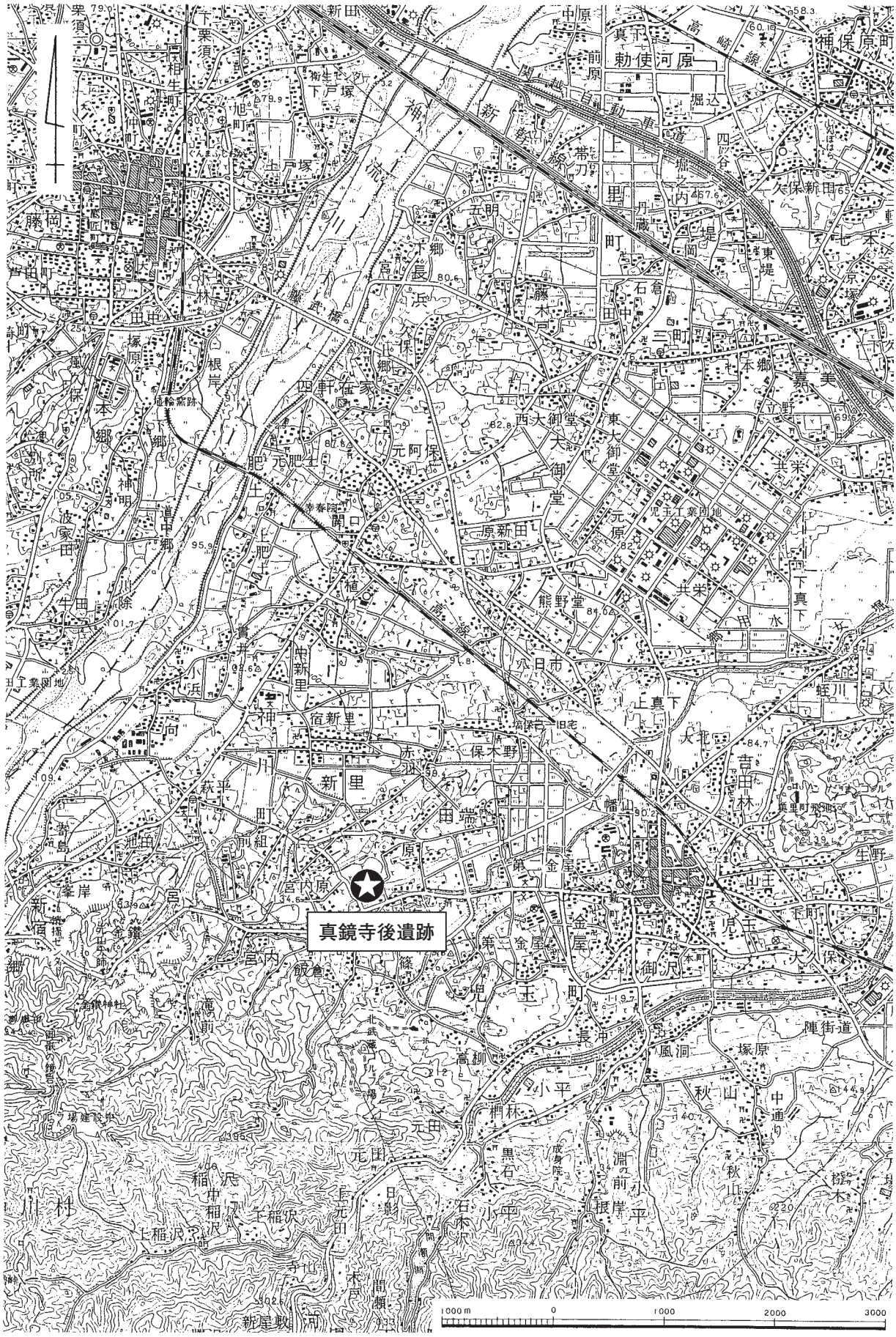
第Ⅴ章　ま　と　め　―G地点出土の中世の遺物について―・・・・・・・・・・ 21

第１節　真鏡寺館跡出土の中世瓦について・・・・・・・・・・・ 21
第２節　真鏡寺館跡出土の内耳鍋について・・・・・・・・・・・ 23

＜参考文献＞ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

写　真　図　版

報 告 書 抄 録



第１図　遺跡の位置

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

平成４年２月10日、住宅供給協同組合の建売分譲住宅建設を予定している埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷(現本庄市児玉町塩谷)字真鏡寺85番地－２と85番地－９の土地所有者である根岸春雄氏より、開発予定地内にかかる埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会に照会があった。

児玉町教育委員会では、早々に現地を確認し、照会のあった開発予定地を『遺跡分布地図』と照合したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地であるNo54-107遺跡(真鏡寺後遺跡)の範囲内に位置していたため、まず事前に試掘調査を実施して開発予定地内の埋蔵文化財の所在を明確にする必要があることを、平成４年２月21日付けで回答した。

その後、３月11日に試掘調査の依頼があり、３月19日に児玉町教育委員会が開発予定地の試掘調査を実施したところ、平安時代の竪穴式住居跡や真鏡寺館跡に関連する堀跡など多くの遺構の所在が確認された。そのため、現状変更を行う場合は、開発予定地内に所在する埋蔵文化財が破壊される可能性が高いため、その保存措置として事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを説明した。

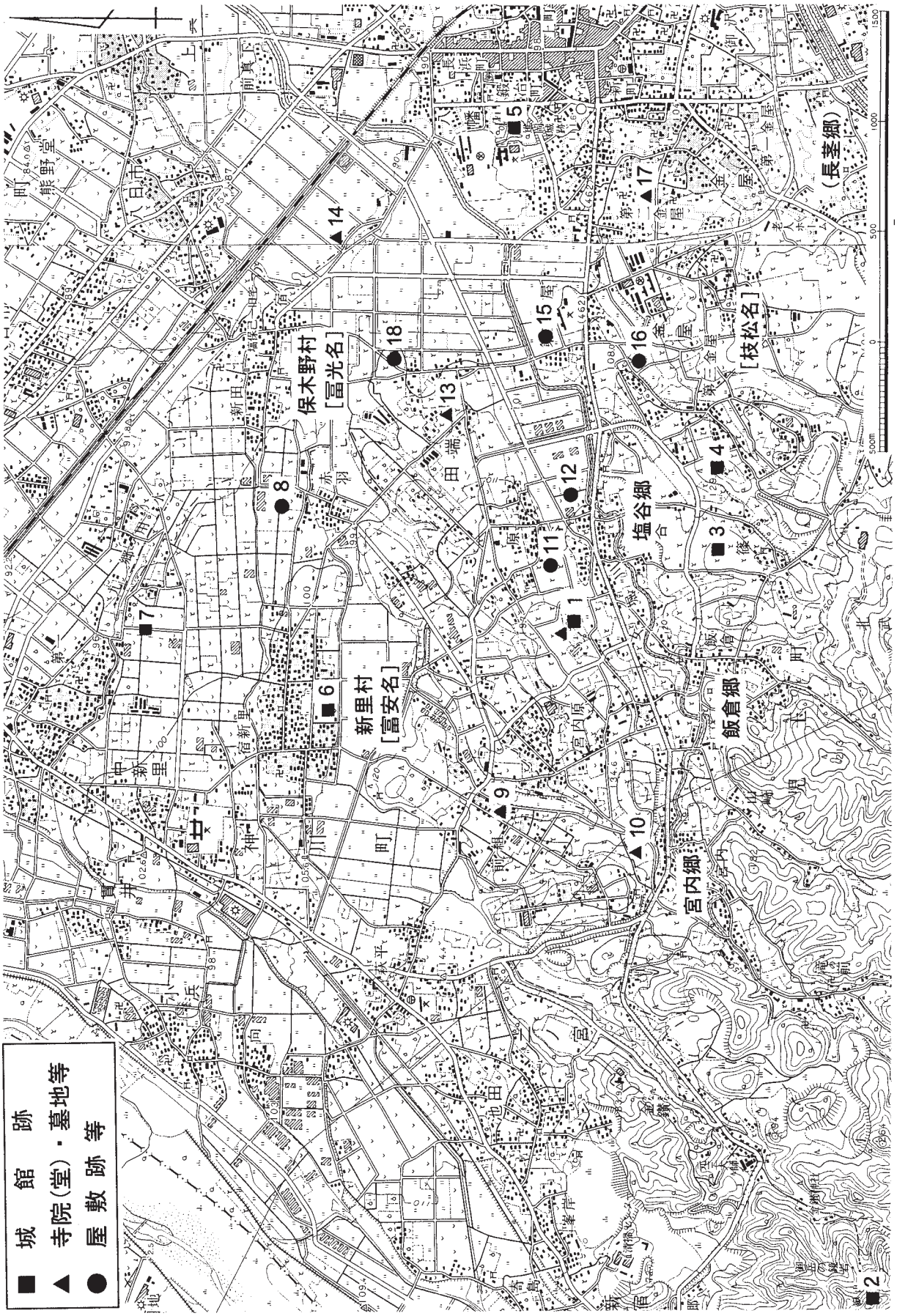
以上の協議を踏まえて、児玉町教育委員会の指導のもと、平成４年３月30日に住宅供給協同組合代表理事小山省三と児玉町遺跡調査会会長冨丘文雄の間で、埋蔵文化財保存事業の委託契約が締結され、開発予定地内における記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして、発掘調査地点を真鏡寺後遺跡Ｇ地点と命名した。

発掘を実施するにあたっては、平成４年３月５日に住宅供給協同組合代表理事小山省三氏より、文化財保護法第57条の２第１項(当時)の規定による「埋蔵文化財発掘の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付けで埼玉県教育委員会に進達した。これに対して埼玉県教育委員会からは、平成４年５月７日付け教文第３-35号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」が、住宅供給協同組合代表理事小山省三氏に対して通知され、土木工事等の着工前における発掘調査の実施が指示された。

発掘調査を実施するにあたっては、平成４年３月５日に児玉町遺跡調査会会長冨丘文雄氏より、文化財保護法第57条第１項(当時)の規定による「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日付けで埼玉県教育委員会に進達した。これに対して文化庁長官からは、平成４年６月24日付け委保第５-710号による「埋蔵文化財の発掘調査について」が児玉町遺跡調査会会長冨丘文雄氏に対して通知され、発掘調査は文化財保護法の趣旨を尊重し、慎重に実施するように指示された。

なお、真鏡寺後遺跡Ｇ地点の発掘調査は、平成４年４月６日から同年５月20日の約１ヶ月半の期間を要して実施された。

(本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係)



第２図　周辺の中世主要遺跡

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

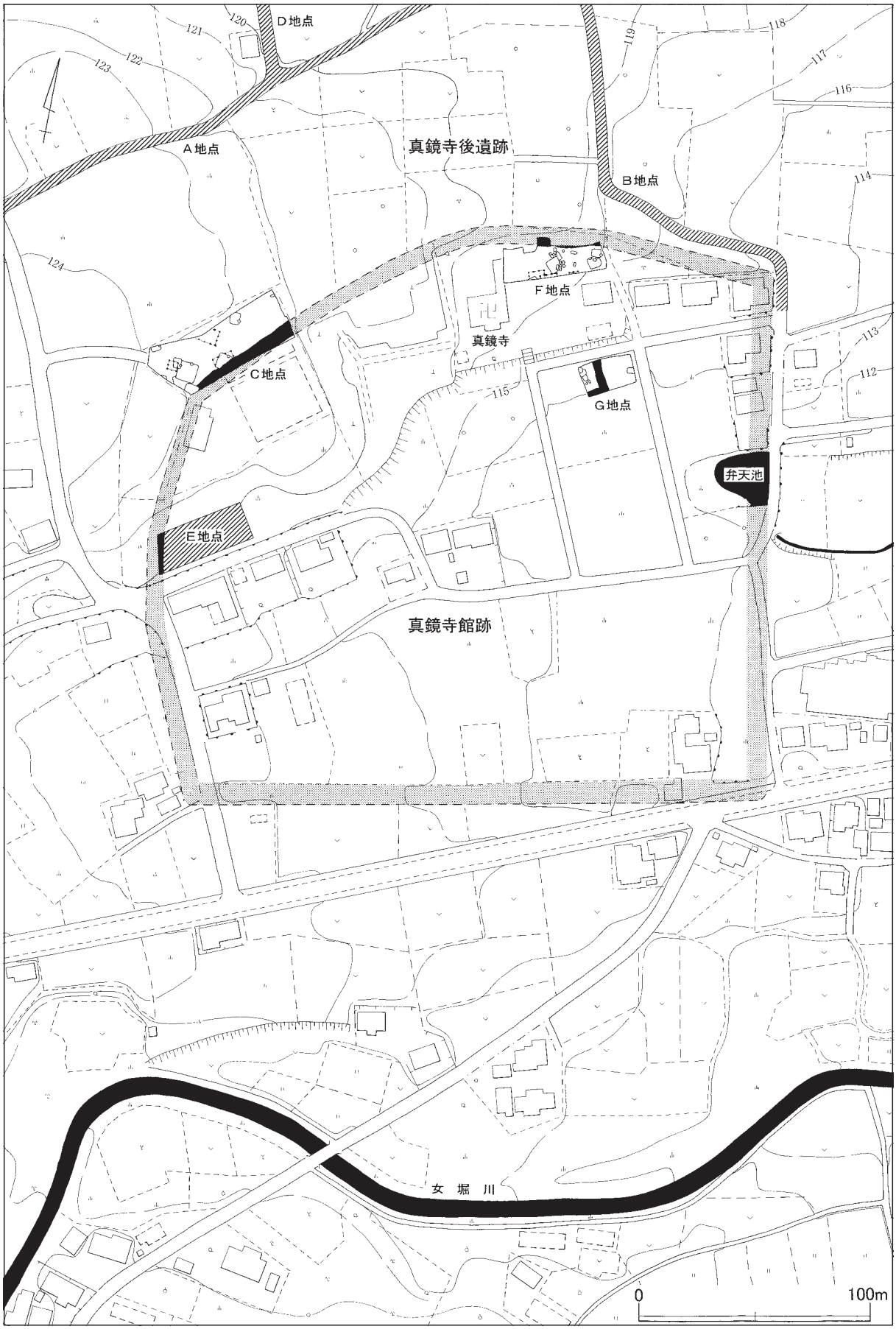
本遺跡は、埼玉県の北端部付近に位置する本庄市の児玉町塩谷に所在し、ＪＲ高崎線の本庄駅から南西方向に直線距離で約９㎞、ＪＲ上越新幹線の本庄早稲田駅や関越自動車道の本庄児玉インターチェンジから同じく約６～７㎞、ＪＲ八高線の児玉駅から西に３㎞の場所にある。

本遺跡周辺の地形は、本庄市の南側半分を占める上武山地から断層線の八王子－高崎構造線によって区分された標高100ｍ～130ｍ程度の児玉丘陵と呼ばれる丘陵地帯に属する。この児玉丘陵は、半島状に延びる複数の小支丘群によって構成されており、支丘間には山地内からの湧水による開析が進んでいくつもの細長い谷が形成され、谷奥からの湧水を集めた溜池灌漑による谷田が発達している。丘陵下の北側には、神流川によって形成された扇状地の本庄台地が広がり、台地の南東側に沿って金鑽川・赤根川・女堀川などの小河川によって形成された、女堀川沖積低地が帯状に広がっている。

本遺跡が立地するこの女堀川上流域の丘陵部には、先土器時代から各時代にわたって多くの遺跡が存在している。中世の遺跡も、近年の発掘調査の進展により、その所在が徐々に明らかになってきたが、その性格や細かな時期が判明するものは少ない。城館跡は、周辺では本遺跡の他に雉ヶ岡城跡・観音山遺跡（別所城）・篠城跡、丘陵下の台地上に岡部屋敷跡や中新里城跡、南側の山地内には御嶽山城跡があるが（埼玉県教育委員会1968、栗山・今井1988）、文献資料等によりその時期やある程度歴史的な動向がわかるのは、戦国時代以降の雉ヶ岡城跡と御嶽山城跡だけである。屋敷・集落は、十二天遺跡（鈴木1981）・北下原遺跡（金子1998）・枇杷橋遺跡Ｄ地点（2001年調査）・ミカド遺跡（鈴木1991）・上一ノ堰遺跡（鈴木1981）などがあるが、枇杷橋遺跡Ｄ地点は、遺構や遺物の内容から有力者の屋敷の可能性が高く、同一支丘上の南西側に近接する別所城の伝承を持つ観音山遺跡（1984・1987年調査）と関係する屋敷跡かもしれない。寺院は、瓦を出土した遺跡が主体で、元大師跡（宮1992、栗岡1996）・真鏡寺後遺跡Ｂ地点（鈴木1991）・羽根倉南遺跡（1993年調査、第16図）で12世紀末～13世紀前半の永福寺式軒瓦（小林2001）が出土し、元大師跡と反り町遺跡（篠崎1995）で13世紀末～14世紀代の剣頭文軒平瓦が出土している。この中で、反り町遺跡から出土した軒平瓦は、当地方では珍しい「陽刻上向き剣頭文」であり、いわゆる「比企型剣頭文軒平瓦」との関係で注目される。墓地は、開墾地から大量の板碑が出土したことで著名な田中供養地（千々和1974）に隣接する田端中原遺跡（徳山1992）があり、相互に近接して所在する金屋西遺跡（恋河内2003）・倉林東遺跡（1984調査）・倉林後Ｂ遺跡（1990年調査）で、円形や隅丸長方形を主体とする密集型の土壙墓群が検出されている。

この女堀川上流域の丘陵部に属する塩谷郷・宮内郷・長茎（沖）郷は、古代末から中世初頭には「枝松名」に属し、同じ丘陵部にある武蔵国二宮で名神大社の格式をもつ金鑽神社の神官名ではなかったかと推測されている（峰岸1978）。しかしその後は、児玉党塩谷氏や丹党安保氏など近隣の在地領主による当地域の所領化が進行して、その所領の多くを失うことになる（野口1991）。

１．真鏡寺後遺跡（真鏡寺館跡）、２．御嶽山城跡、３．篠城跡、４．観音山遺跡（別所城跡）、５．雉ヶ岡城跡、６．岡部屋敷跡、７．中新里城跡、８．北下原遺跡、９．元大師跡、10. 羽根倉南遺跡、11. 塩谷原遺跡、12. ミカド遺跡、13. 田端中原遺跡、14. 反り町遺跡、15. 上一ノ堰遺跡、16. 枇杷橋遺跡、17. 金屋西遺跡、18. 十二天遺跡



第３図　真鏡寺館跡と調査地点

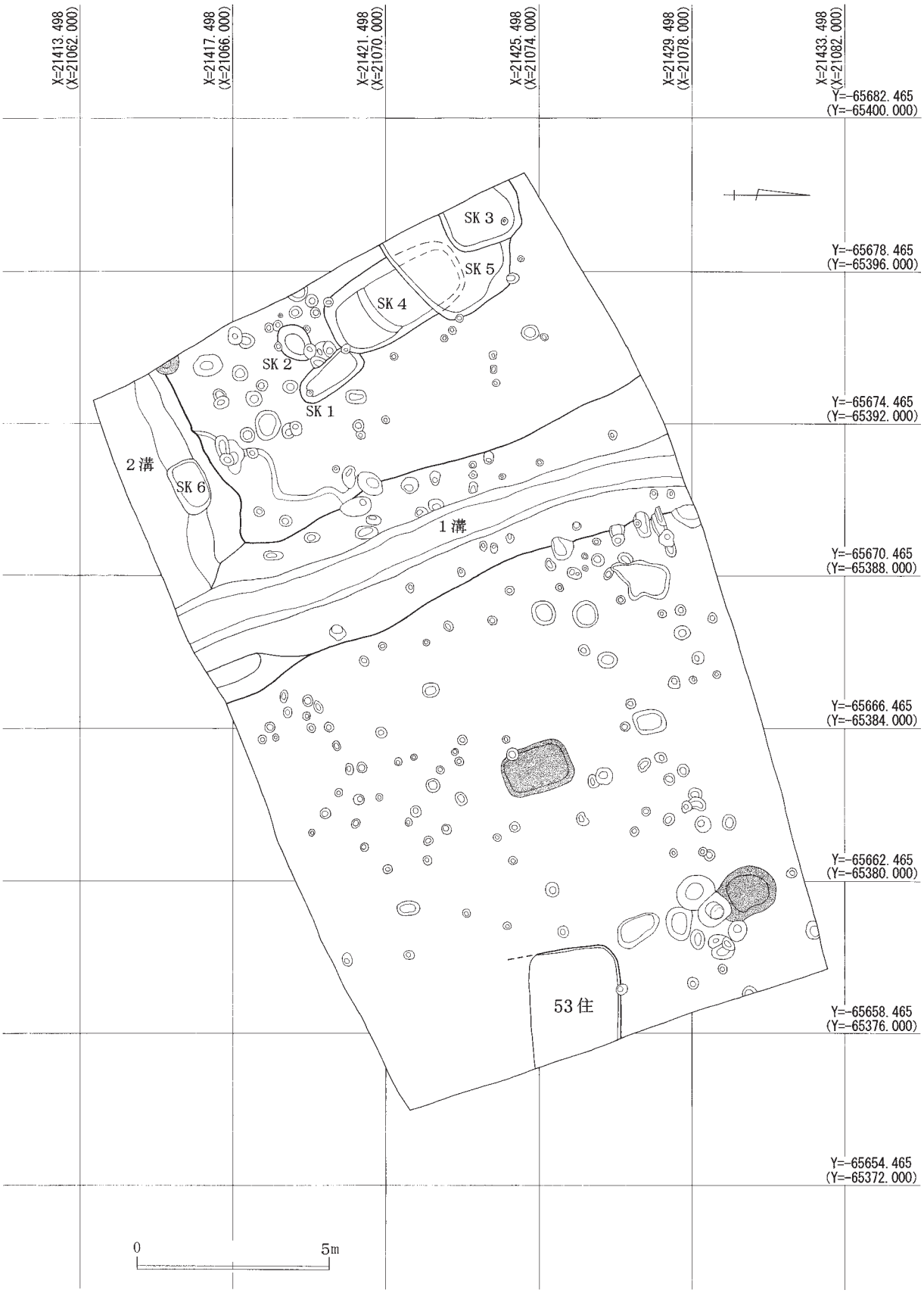
第Ⅲ章　遺跡の概要

真鏡寺後遺跡は、これまでに農道改良舗装工事・牛舎建設・個人住宅建設・建売分譲住宅建設などの開発に伴って、Ａ～Ｇ地点の７次にわたる比較的小規模な発掘調査が実施され、縄文時代（前期）～平安時代（中期）の集落遺跡と中世の真鏡寺館跡を含む複合遺跡であることが、徐々に明らかになっている（鈴木1987、大屋1988、恋河内1991）。今回報告するＧ地点は、中世の真鏡寺館跡の内部に位置し（第３図）、調査区内から館内部の敷地を区画する比較的規模の大きな薬研堀と箱堀の形状を呈する２条の堀跡が検出されている（第４図）。

真鏡寺館跡は、南北方向約240ｍ、東西方向約250ｍの規模をもつ、平面形がやや不整の方形を呈する方形館である。館跡の北側半分は標高120ｍ前後の丘陵上の平坦面付近から丘陵南側斜面にあたり、館跡の南側半分は旧赤根川（現女堀川）によって形成された段丘上の水田を主体とする低地部を取り込んでいる。その南北両端の比高差は、約８ｍを測る。館跡の周囲は堀によって囲繞されていると考えられ、北側はＣ地点とＦ地点で、西側はＥ地点で堀の一部が検出されている。南側の堀は、その痕跡として幅約13ｍ・長さ約220ｍにわたる直線的な帯状の地割りが現地表面に残っている。東側の堀については、北側と南側の堀の位置から、弁天池の東側に接する南北方向の直線的な道路に比定できるが、館跡の北側と西側の堀が直線ではなく、弓状に湾曲していることからすると、東側の堀についても特に弁天池以北の部分は、現地表面に見られる地割りの形態から、西側に傾いて湾曲していることも十分考えられよう。この丘陵部に位置する館跡の北側と西側の堀が弓状に湾曲する形態をとっているのは、おそらく丘陵部の水脈があるハードローム層下の白色粘土層まで堀を掘削することによって得た丘陵部の湧水を、水が流れるための抵抗を少なくしてスムースに丘陵下の低地部の堀までできるだけ多く流すための、館堀の灌漑機能を高める一つの工夫ではないかと考えられる。この館跡の外周を囲繞する北側の堀は、幅約６ｍ・確認面からの深さ約２ｍの規模をもち、Ｃ地点とＦ地点の調査では、ともに当初は底面がやや広い箱堀状の形態であったが、後に底面が狭く壁の傾斜が急な薬研堀の形態に掘り返されたことが明らかになっている。なお、この北側の堀は、現在も空堀としてその痕跡が一部残っており、かつてはその内側に沿って土塁状の高まりも認められた。

館の内部構造については、以前地籍図に見られる地割りの痕跡から、現真鏡寺本堂の南側に東西約120ｍ・南北約100ｍの長方形を呈する内郭の存在を推測したことがある（恋河内1991）。Ｇ地点で検出された南北方向に直線的な流路をとる第１号溝跡は、その内郭が推測された地割りから西に約15ｍずれているが、流路方向はその地割りと並行し、規模や形態は館跡の外周を囲繞する堀とほとんど遜色ないことから、館の内部を区画する溝の中でも、最も重要な内郭の区画と関係する堀の一つと見てよいと思われる。しかしながら、館内部の区画も予想された地割りと整合しないものや重複する堀（第２号溝跡）などがあることから、単一的なものではなく幾多の変遷があったことは容易に窺えよう。

真鏡寺館跡の成立時期については、出土した瓦（永福寺式軒平瓦）の年代から13世紀前半以前とする説（鈴木1991）と、その瓦を伴う寺院を破却して15世紀代に形成されるとする説（荒川1998）がある。今回のＧ地点の調査では、15世紀後半の堀跡が検出されたが、ただちにこれをもって本館跡の成立時期とするのは早計であろう。本館跡の調査は、未だ小規模な地点的調査が主体で、館跡に関連する遺物も未だ貧弱な状況である。今後の調査の進展を待ちつつ、慎重に検討を重ねていく必要があろう。


X=21413.498
(X=21062.000)
X=21417.498
(X=21066.000)
X=21421.498
(X=21070.000)
X=21425.498
(X=21074.000)
X=21429.498
(X=21078.000)
X=21433.498
(X=21082.000)
Y=-65682.465
(Y=-65400.000)
Y=-65678.465
(Y=-65396.000)
Y=-65674.465
(Y=-65392.000)
Y=-65670.465
(Y=-65388.000)
Y=-65666.465
(Y=-65384.000)
Y=-65662.465
(Y=-65380.000)
Y=-65658.465
(Y=-65376.000)
Y=-65654.465
(Y=-65372.000)
SK 3
SK 5
SK 4
SK 2
SK 1
2溝
SK 6
1溝
53住
0
5m

第４図　Ｇ地点全体図

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

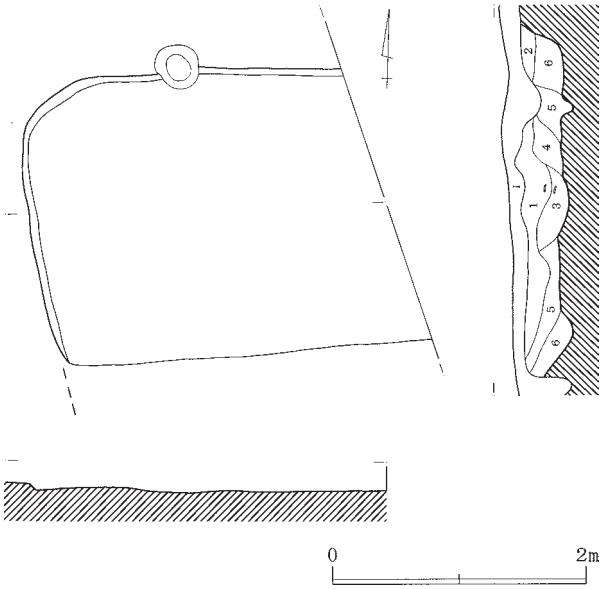
第１節　竪穴式住居跡

第53号住居跡（第５図、図版３）

調査区東端の中央付近に位置する。調査区内で検出されたのは住居跡の西側部分だけであるため、本住居跡の全容は不明である。また、住居跡の南側半分は後世の耕作によってすでに削平されており、遺構の遺存状態は極めて悪い。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い方形か長方形を基調にすると思われるが、住居の北側壁と西側壁は直角ではなくやや歪んでおり、台形や平行四辺形のような不整の四角形であったことが考えられる。規模は、南北方向が最高で2.30ｍまで、東西方向が最高で2.90ｍまで測れる。住居の主軸方位は不明であるが、住居の北側壁は、ほぼＮ－90°―Ｅの東西方向を向いている。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは調査区東側壁面で30㎝前後確認できる。壁溝は、調査区内で検出された部分の各壁下には見られない。床面は、ロームブロックを含む暗茶褐色土を埋め戻した貼床式のようで、調査区内ではほぼ平坦に作られている。カマドは、調査区内の検出された部分には見られないが、おそらく調査区外の北側壁か東側壁に付設されているものと思われる。

出土遺物は、住居中央付近の床面付近や覆土中から、平安時代前期後半（９世紀後半）頃の土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである（第６図）。



第５図　第53号住居跡

第53号住居跡土層説明

第１層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。１㎜程度の白色パミスと1～５㎜の焼土粒子を多く含み、５㎜位の炭化粒子を疎らに含む。）

第２層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。第１層に類似するが、焼土粒子を含まない。）

第３層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。第１層に類似するが、焼土粒子が非常に多い。）

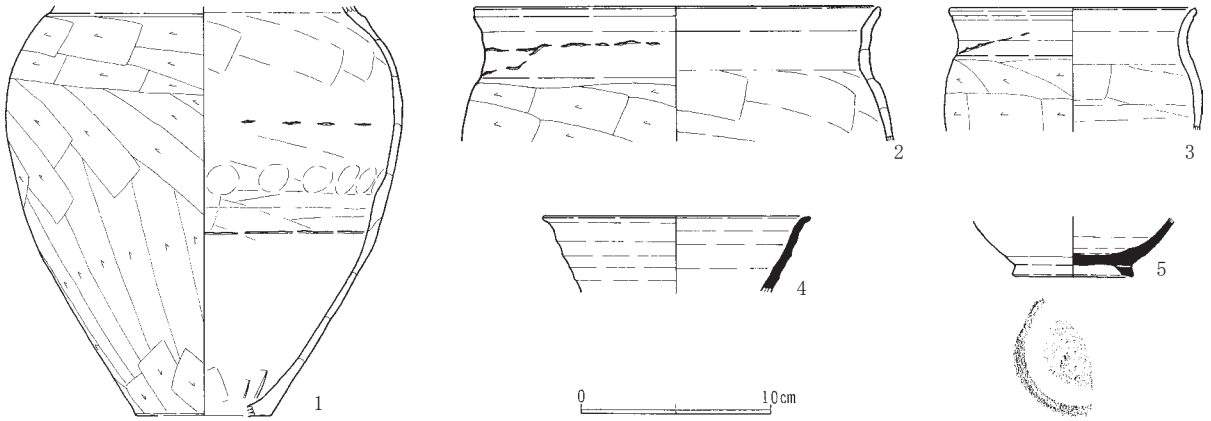
第４層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。５㎜以下の焼土粒子と１～10㎜の肌色粒子を疎らに含む。）

第５層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜以下の白色パミスと１～５㎜のローム粒子を疎らに含む。）

第６層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。１㎜以下の白色パミスをわずかに含む。）

第53号住居跡出土遺物観察表

1	甕	A.残存高21.8、底部径(7.2)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部外面ケズリ、内面ナデの後上半篦ナデ。底部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－黒茶褐色、内－淡茶褐色。F.胴部1/5破片。H.覆土中。
2	甕	A.口縁部径(21.6)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.口縁部1/4破片。H.床面付近。



第６図　第53号住居跡出土遺物

3	小形甕	A.口縁部径(13.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篦ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー茶褐色。F.口縁部1/5破片。H.床面付近。
4	須恵器坏	A.口縁部径(14.2)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外ー暗灰褐色。F.口縁部1/6破片。G.環元煙焼成。末野産。H.覆土中。
5	須恵器高台付埦	A.高台部径(6.4)。B.ロクロ成形。高台部貼り付け。C.体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面回転ナデ。D.黒色粒、白色粒。E.内外ー暗灰色。F.底部1/3破片。G.環元煙焼成。末野産。H.床面付近。

第２節　土　　坑

第１号土坑（第７図）

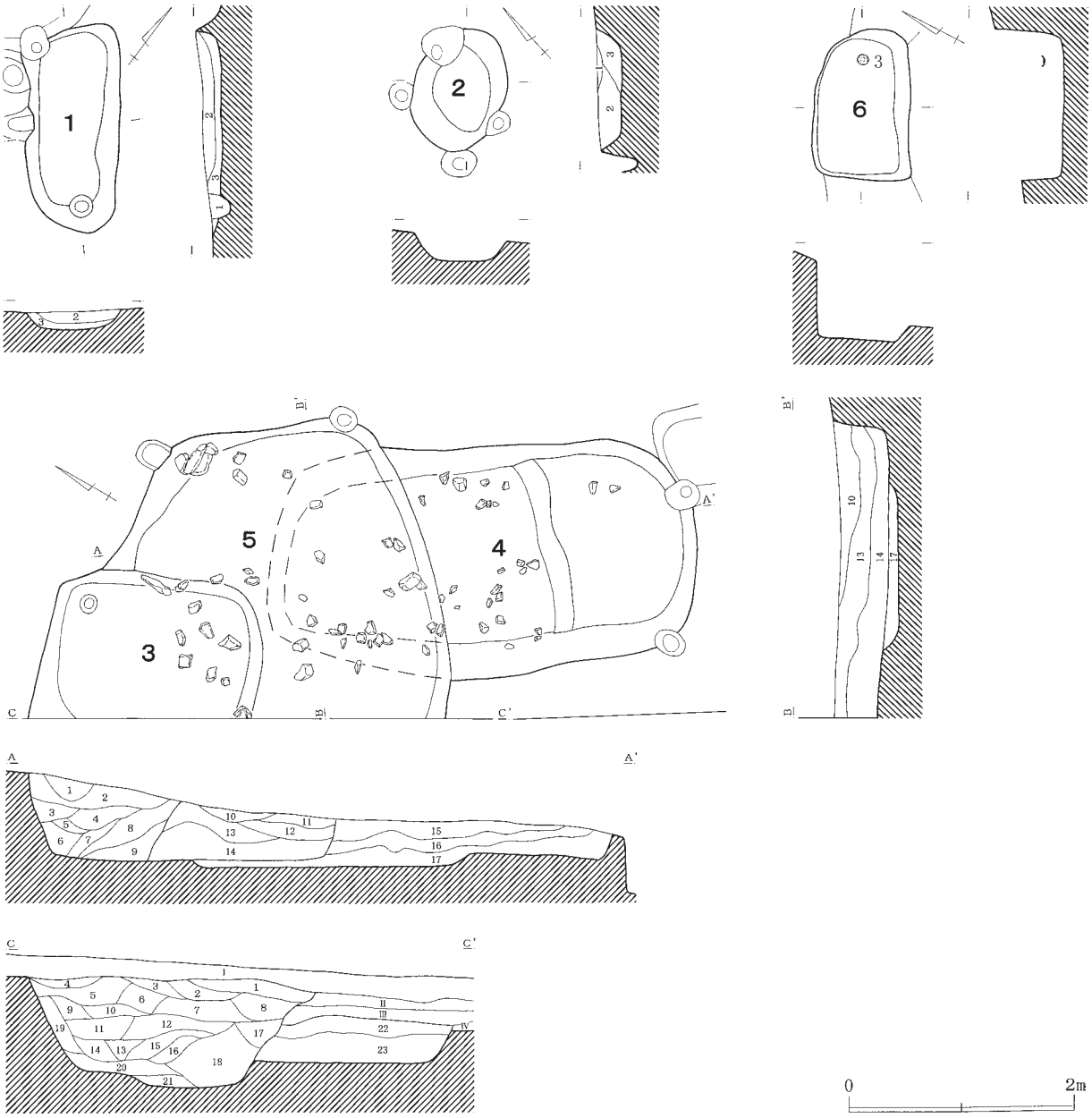
調査区西側の中央付近に位置する。土坑の北西端は第４号土坑と接しているが、相互の新旧関係は不明である。平面形は、各コーナー部の丸みが強いやや不整の隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、北西～南東方向186cm、北東～南西方向84cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で16cmある。底面は、広く比較的平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第２号土坑（第７図）

調査区西端の中央付近に位置する。北側には第４号土坑が、東側には第１号土坑が近接している。平面形は、北東～南西方向に長い楕円形ぎみの形態を呈している。規模は、北東～南西方向110cm、北西～南東方向84cmを測る。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。底面は、比較的広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第３号土坑（第７図、図版４・５）

調査区の西端に位置する。第５号土坑と重複し、それを切っている。土坑の西側半分は調査区外にあるため、本土坑の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、北西～南東方向に長い長方形ぎみの形態である可能性が高いと思われる。規模は、北西～南東方向193m、南西～北東方向は170cmまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で95cmある。底面は、広く平坦である。



第７図　土　　坑

第１号土坑土層説明

第１層：黒褐色土層（しまり、粘性多少あり。１㎝位のローム粒子を多少含む。）
第２層：暗褐色土層（しまり、粘性多少あり。１㎜位の白色パミスを多く含み、ロームブロックを疎らに含む。）
第３層：暗褐色土層（しまり、粘性多少あり。ロームブロックを多く含む。）

第２号土坑土層説明

第１層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１㎜位のローム粒子を多く含む。）
第２層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子を多く含み、５㎝前後のロームブロックを疎らに含む。）
第３層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子を多く含む。）

第３・５号土坑土層説明（Ｃ－Ｃ’）

第Ⅰ層：黒 色 土 層（しまりあり、粘性少ない。１～２㎜の浅間山系Ａ軽石を多く含む。）
第Ⅱ層：暗褐色土層（しまりあり、粘性少ない。１～２㎜程度の浅間山系Ａ軽石を疎らに含み、１㎜以下のローム粒子を全体に混じる。）
第Ⅲ層：黒褐色土層（しまりあり、粘性少ない。１～５㎜のローム粒子を疎らに含み、１～２㎜の浅間山系Ａ軽石をわずかに含む。）

第Ⅳ層：黒 色 土 層（しまりあり、粘性少ない。１㎜程度の白色パミスを多く含み、ロームブロックを所々に含む。）
第１層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１～２㎜ の浅間山系Ａ軽石を多く含み、１～10㎜のローム粒子を均一に含む。）
第２層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～２㎜の浅間山系Ａ軽石をわずかに含み、１～20㎜のローム粒子を疎らに含む。）
第３層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。第２層に類似するが、ローム粒子が少ない。）
第４層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。0.5㎜以下の白色パミスを疎らに含み、１～５㎜のローム粒子を均等に含む。）
第５層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１～２㎜の浅間山系Ａ軽石を疎らに含み、ロームブロックを全体に混入する。）
第６層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１～２㎜の浅間山系Ａ軽石をわずかに含み、１～５㎜のローム粒子を均等に含む。）
第７層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子をわずかに含む。）
第８層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子を多く含み、２～３㎝のロームブロックを疎らに含む。）
第９層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１～５㎜ のローム粒子を非常に多く含む。）
第10層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。第９層に類似するが、第９層に比べローム粒子が少ない。）
第11層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子とロームブロックを疎らに含む。）
第12層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子をわずかに含む。）
第13層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子を疎らに含む。）
第14層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子を多く含み、ロームブロックを疎らに含む。）
第15層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子を多く含む。）
第16層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。第15層に類似するが、ローム粒子が少ない。）
第17層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜程度のローム粒子を均等に含み、ロームブロックを疎らに含む。）
第18層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜程度のローム粒子を疎らに含む。）
第19層：黄 色 土 層（しまり、粘性あり。わずかにロームブロックを混入する。）
第20層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。１～３㎝のローム粒子を疎らに含む。）
第21層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。第20層に類似するが、ローム粒子が多い。）
第22層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜程度のローム粒子を均一に含み、１～３㎝のロームブロックを疎らに含む。）
第23層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜程度のローム粒子を均一に含み、１～３㎝のロームブロックと黒色土を多く含む。）

第４・５号土坑土層説明（Ａ－Ａ’　Ｂ－Ｂ’）
第１層：茶褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜位のローム粒子を全体に多く含み、１～５㎝程度の石を多く含む。）
第２層：茶褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜位のローム粒子を多く含み、１～５㎝の石を疎らに含む。）
第３層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子を疎らに含む。）
第４層：黄褐色土層（しまり、粘性あり。ロームブロックを全体に含む。）
第５層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子を多く含む。）
第６層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１㎜位のローム粒子を多く含み、ロームブロックを疎らに含む。）
第７層：明褐色土層（しまりなし、粘性あり。１～３㎜の青色ロームを非常に多く含む。）
第８層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子をまばらに含む。）
第９層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子を多く含み、ロームブロックを疎らに含む。）
第10層：明褐色土層（しまり、粘性あり。１㎜程度のローム粒子を疎らに含む。）
第11層：黒 色 土 層（しまり、粘性あり。ロームブロックを疎らに含む。）
第12層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。ロームブロックと黒色土が混じる。）
第13層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子を疎らに含む。）
第14層：黄 色 土 層（しまり、粘性あり。ローム層に黒色土が疎らに混じる。）
第15層：黄褐色土層（しまり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子を多く含む。）
第16層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１～20㎜のローム粒子を疎らに含む。）
第17層：暗褐色土層（しまり、粘性あり。第16層に類似するが、ローム粒子が多い。）

出土遺物は、覆土中から片岩を主体とする礫が少量出土しただけである。本土坑は、覆土中に浅間山系Ａ軽石を含むことから、近世後半以降の所産と考えられる。

第４号土坑（第７図、図版４・５）

調査区西端の中央付近に位置する。第５号土坑と重複し、それに切られている。また、土坑の南東端は隣接する第１号土坑と接しているが、相互の新旧関係は不明である。平面形は、各コーナー部が丸みをもつ北西～南東方向に長い隅丸長方形ぎみの形態を呈している。規模は、北西～南東方向382㎝、南西～北東方向は202㎝を測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最

高で42㎝ある。底面は、広く平坦であるが、北西側が一段深くなっている。

出土遺物は、覆土中から内耳鍋や片口鉢か擂鉢の破片が少量出土しただけである。その他には、古墳時代～平安時代の土師器の破片が覆土中から少量混入して出土している。

第５号土坑（第７図、図版４・５）

調査区の西端に位置する。重複する第３号土坑に切られ、第４号土坑を切っている。調査区内で検出されたのは土坑の東側半分だけであるため、本土坑の全容は不明である。規模は、北西～南東方向288㎝、南西～北東方向は271㎝まで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で73㎝ある。底面は、広く平坦である。

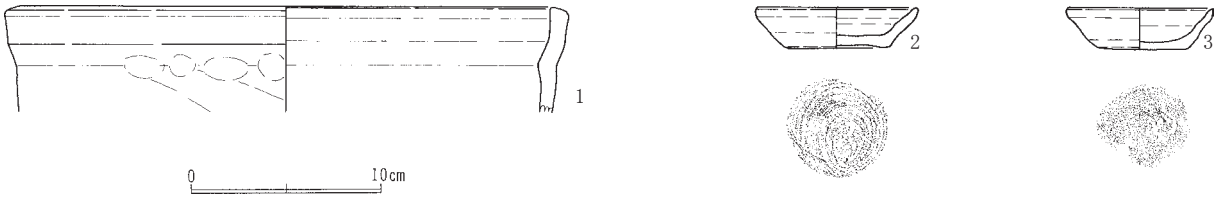
出土遺物は、覆土中から内耳鍋や片口鉢か擂鉢の破片が少量出土しただけである。その他には、古墳時代～平安時代の土師器の破片が覆土中から少量混入して出土している。

第６号土坑（第７図、図版６）

調査区の南西側に位置する。第２号溝跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。平面形は、南西～北東方向に長い長方形ぎみの形態を呈している。規模は、南西～北東方向134㎝、北西～南東方向86㎝を測る。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは最高で68㎝ある。底面は、広く平坦である。

出土遺物は、土坑の北東側寄りの位置で、底面から10㎝程度浮いた覆土中から、完形のかわらけが１個体(第８図No３)正位の状態で出土している。その他には、覆土中からかわらけの破片(第８図No２)や平安時代のコの字甕の破片が混入して出土しているだけである。

本土坑は、その形態や遺物の出土状況からみて、墓の可能性が高いと思われる。時期は、遺構の重複関係や出土遺物から、15世紀後半～16世紀前半頃の所産と考えられる。



第８図　土坑出土遺物

土坑出土遺物観察表

1	内 耳 鍋	A.口縁部径(30.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E.内外ー暗灰色。F.口縁部1/8破片。H.第３～５号土坑。
2	かわらけ	A.口縁部径8.5、器高2.2、底部径5.5。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー茶褐色。F.3/4。H.第６号土坑覆土中。
3	かわらけ	A.口縁部径7.8、器高2.2、底部径4.8。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外ー明橙褐色。F.完形。H.第６号土坑覆土中。

第３節　溝　　跡

第１号溝跡（第９図、図版７）

調査区の西側に位置し、南側で重複する第２号溝跡に上半部を切られている。調査区内では地形の等高線に対して直交するように、やや北西から南東方向に向いて、ほぼ直線的な流路をとっている。その方向は、調査区の東西両側に近接する南北方向の道路の地割方向とほぼ一致しており、あるいは、本館跡の内郭を画する堀の可能性も考えられる。

規模は、溝上面が３ｍ～3.50ｍ程度、底面が50㎝～70㎝程度の比較的均一な幅である。断面の形態は、いわゆるＶ字形の薬研堀に近い形態で、現地表面からの深さが調査区の南北両壁面とも2.15ｍ、遺構確認面からの深さが最高で1.80ｍある。壁は、上半が緩やかに傾斜して漏斗状に直線的に開き、下半は上半に比べて急傾斜して直線的に落ち込んでいる。底面は、比較的狭く凹凸がなくほぼ平坦で、南側に向かって傾斜している。調査区北端と南端での溝底面の比高差は、85㎝ある。覆土の状態は、調査区北端の土層断面では自然堆積の状態を示すが、調査区南端の土層断面では溝の下半分で一部掘り返されたような痕跡も見られる。

出土遺物は、覆土上半から国産陶器の常滑窯製品の甕の破片や、在地産土器の内耳鍋・片口鉢・擂鉢・かわらけの破片、瓦や板碑の破片などが出土しているが、これらの遺物は調査時には第２号溝跡との重複関係が明確でなかったため、第２号溝跡から出土した遺物も混在しており、第１号溝跡と第２号溝跡の遺物の帰属が明確にできるものは少ない。本溝跡から出土したことが判明するのは、調査時の記録写真から判断すると、第10図No12のかわらけだけである。ちなみに、第10図No16の坏と第11・12図のNo19～28の瓦の破片は、明らかに他の出土遺物と時期が異なり、混入と考えてよい。

第２号溝跡（第９図、図版11）

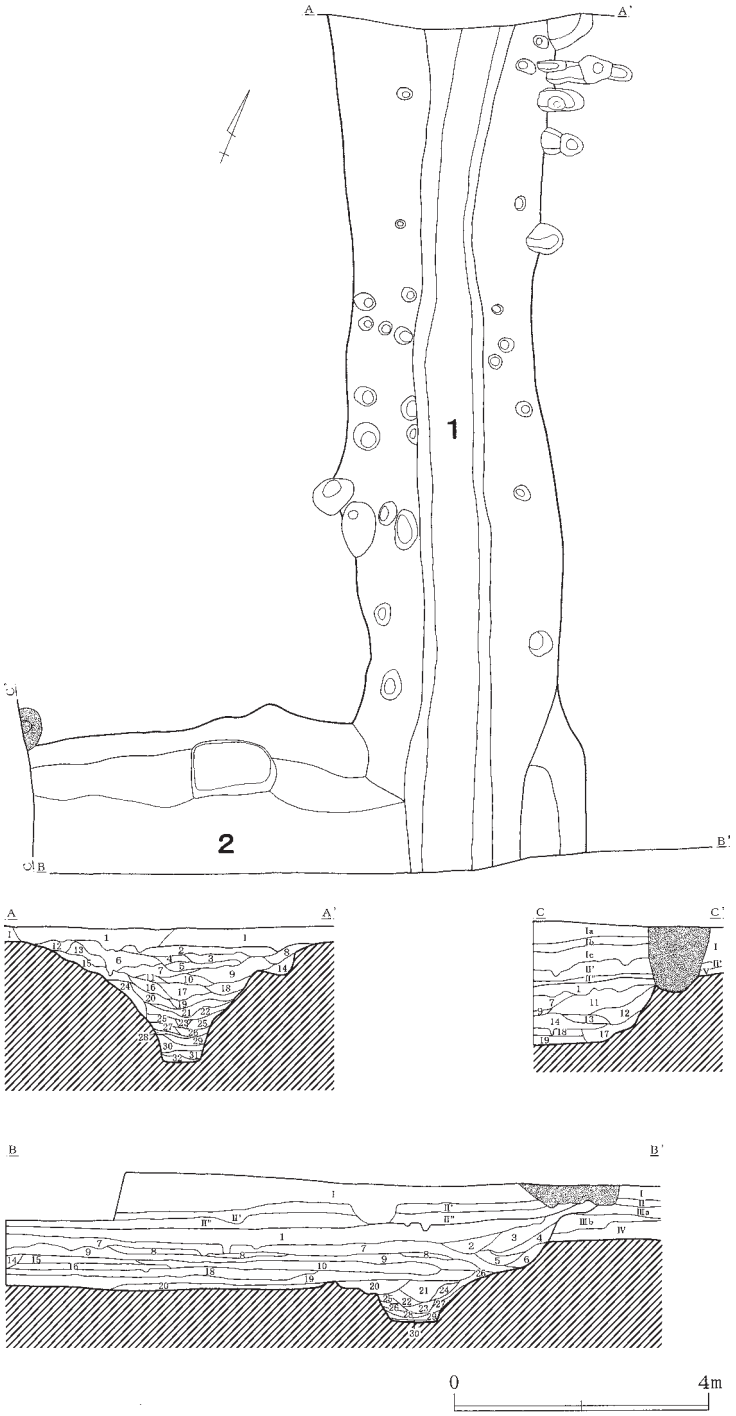
調査区の南西側に位置し、重複する第１号溝跡を切っている。第６号土坑とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。調査区内では、地形の等高線に並行するように、南西から北東方向にほぼ直線的な流路をとっている。その方向は、重複する第１号溝跡とほぼ直角をなすが、その東側は第１号溝跡のところで途切れている。

調査区内で検出されたのは、溝の北側半分だけであるため、本溝跡の形態等は不明であるが、検出された部分から判断すると、本溝跡は重複する第１号溝跡とは断面の形態が異なり、壁が直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面が広く平坦な箱堀状の形態を呈していると考えられる。規模は、確認面での上幅が2.4ｍ以上、底面の下幅が1.2ｍ以上あり、確認面からの深さは約１ｍを測る。

出土遺物は、第１号溝跡と同様に遺物の帰属が明確にできるものは少ない。調査時の記録写真等から本溝跡の出土遺物として判断できるのは、第10図No８～11のかわらけだけである。

第１・２号溝跡出土遺物観察表

1	内　耳　鍋	A.口縁部径(29.6)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。　F.口縁部1/8破片。G.須恵質。胴部外面上半には指頭圧痕が顕著に見られる。H.第１・２号溝跡覆土上層。
2	内　耳　鍋	A.口縁部径(30.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面箆ナデ。底部内外面ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。　F.口縁部1/6、底部1/6破片。G.須恵質。外面煤付着。H.第１・２号溝跡覆土上層。



第９図　第１・２号溝跡

第１号溝跡土層説明

調査区北側壁面（Ａ－Ａ’）

第１層：灰色土層（しまり弱い、粘性あり。１㎜程度の浅間山系Ａ軽石を多く含み、底辺に鉄分を多く含む。）

第２層：黄褐色土層（しまりややあり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子を多く含み、青白色のロームブロックをわずかに含む。１～５㎜の焼土粒子・炭化物をわずかに含み、５～30㎜の石を疎らに含む。）

第３層：黄褐色土層（しまりややあり、粘性あり。第２層に類似するが、ローム粒子・ロームブロックが多い。）

第４層：黄褐色土層（しまりややあり、粘性あり。第３層に類似するが、ローム粒子・ロームブロックがさらに多い。）

第５層：黄褐色土層（しまりややあり、粘性あり。第４層に類似するが、ローム粒子・ロームブロックが多い。）

第６層：明褐色土層（しまりややあり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子と１㎜以下の白色パミスを非常に多く含み、１～５㎜の焼土粒子・炭化粒子を疎らに含む。）

第７層：褐色土層（しまりややあり、粘性あり。第６層に類似するが、第６層に比べてローム粒子が少ない。）

第８層：褐色土層（しまりややあり、粘性あり。１～10㎜のローム粒子と１㎜以下の白色パミスを多く含み、ロームブロックをまばらに含む。）

第９層：褐色土層（しまりややあり、粘性あり。第８層に類似するが、ロームブロックを含まない。）

第10層：褐色土層（しまりややあり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子と１㎜以下の白色パミスを多く含む。）

第11層：褐色土層（しまりややあり、粘性あり。第10層に類似するが、青白色のロームブロックを多く含む。）

第12層：灰色土層（しまりややあり、粘性あり。第１層に類似するが、１～10㎜のローム粒子を疎らに含む。）

第13層：褐色土層（しまりややあり、粘性あり。１㎜以下の白色パミスと１～10㎜のローム粒子を多く含む。）

第14層：暗褐色土層（しまりややあり、粘性あり。ロームブロックを疎らに含む。）

第15層：黄褐色土層（しまりややあり、粘性あり。１～５㎜のローム粒子を非常に多く含み、１～２㎝のローム粒子を疎らに含む。）

第16層：褐 色 土 層（しまりややあり、粘性あり。第15層に類似するが、第15層に比べてローム粒子が少ない。）

第17層：褐 色 土 層（しまりややあり、粘性あり。第16層に類似するが、第16層に比べてローム粒子が少ない。）

第18層：暗褐色土層（しまりややあり、粘性あり。ローム粒子が全体に混じり、１～３㎝の青白色ロームを疎らに含む。）

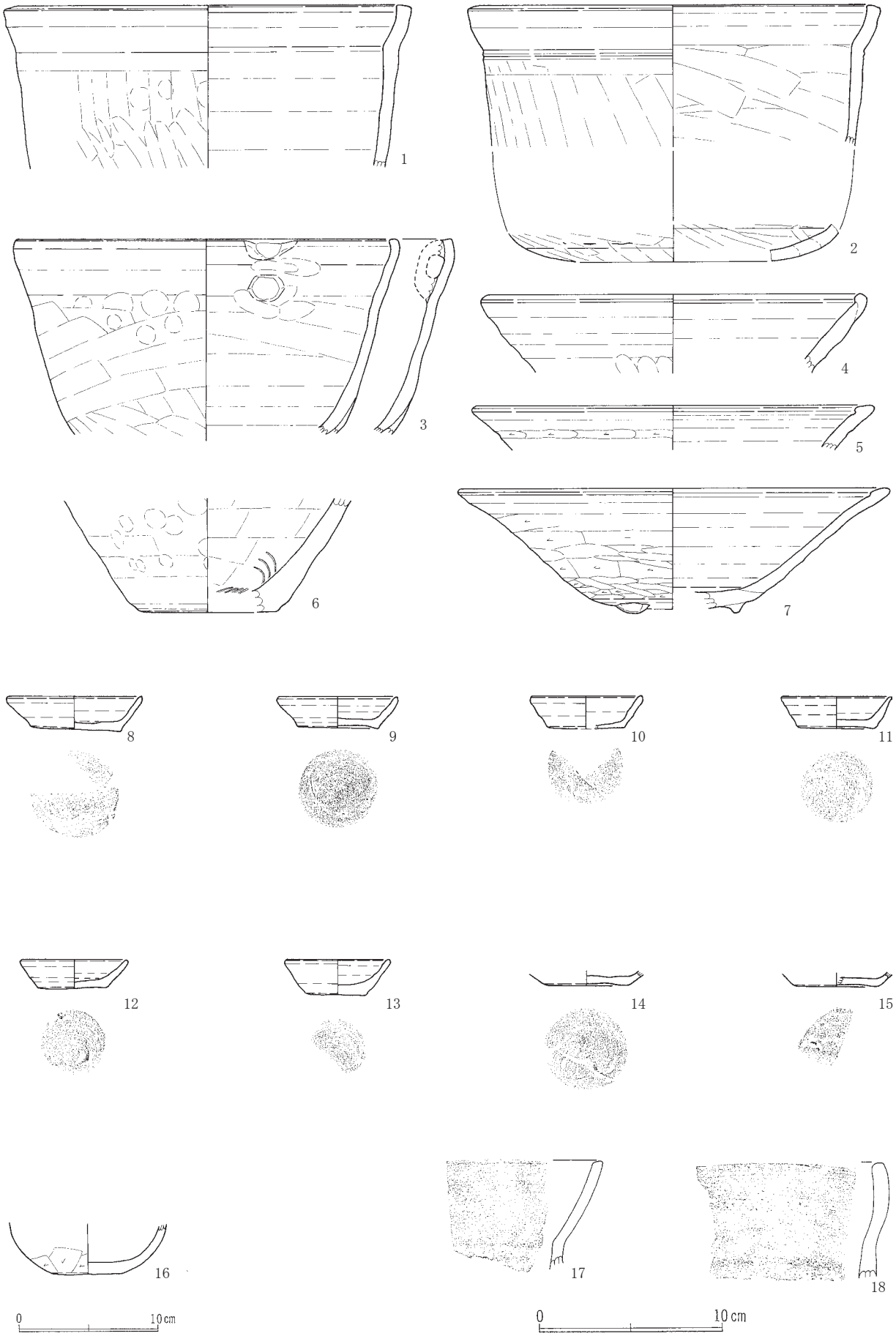
第19層：褐 色 土 層（しまり、粘性あり。１㎜以下の白色パミスと１～10㎜のローム粒子を疎らに含み、５～10㎜の焼土粒子・炭化物をわずかに含む。）

第20層：褐　色　土　層　（しまり、粘性あり。第19層に類似するが、ローム粒子を含まない。）
第21層：褐　色　土　層　（しまり、粘性あり。第20層に類似するが、焼土粒子・炭化物が少ない。）
第22層：褐　色　土　層　（しまり、粘性あり。第21層に類似するが、第21層に比べて１～10㎜のローム粒子が多く、しまっている。）
第23層：褐　色　土　層　（しまり、粘性あり。第22層に類似するが、ロームブロックを多く含む。）
第24層：褐　色　土　層　（しまり、粘性強い。青白色のロームブロックを非常に多く含む。）
第25層：褐　色　土　層　（しまり、粘性強い。青白色のロームブロックと黄色のロームブロックが多く混入する。）
第26層：褐　色　土　層　（しまり、粘性強い。黄色のロームブロックを非常に多く含む。）
第27層：褐　色　土　層　（しまり、粘性強い。黄色と青白色のロームブロックを多く含む。）
第28層：暗灰褐色土層　（しまり、粘性強い。黄色と青白色のロームブロックをわずかに含む。）
第29層：暗灰褐色土層　（しまり、粘性強い。１～10㎜のローム粒子をわずかに含む。）
第30層：暗灰褐色土層　（しまり、粘性強い。第29層に類似するが、第29層に比べてローム粒子が多い。）
第31層：暗灰褐色土層　（しまり、粘性強い。青白色と黄色のロームブロックを非常に多く含む。）
第32層：暗灰褐色土層　（しまり、粘性強い。第31層に類似するが、１～３㎝程度の石を多く含む。）

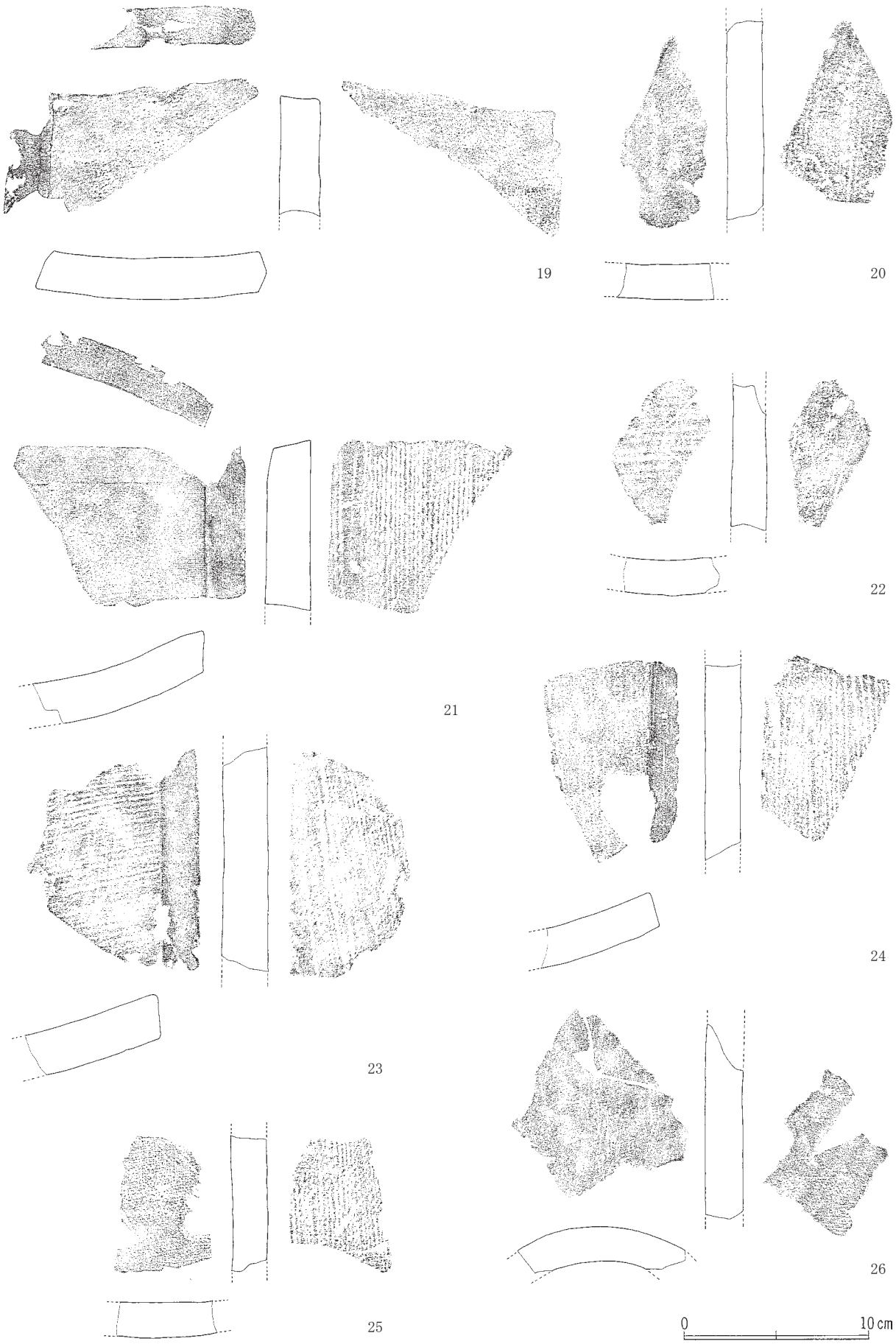
第１・２号溝跡土層説明

調査区南・西側壁面（Ｂ－Ｂ’　Ｃ－Ｃ’）

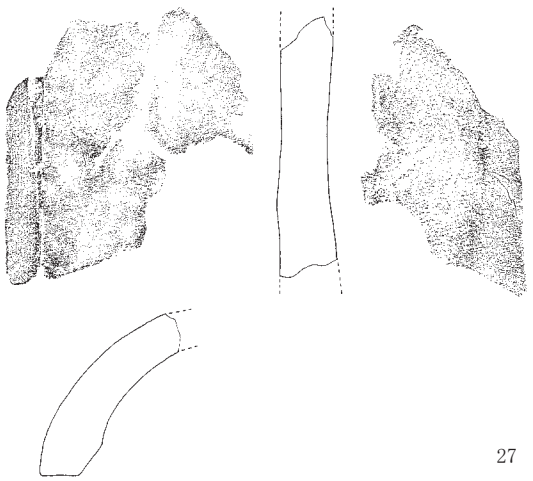
第Ⅰ層：褐　色　土　層　（しまり、粘性あり。１～２㎜の浅間山系Ａ軽石を非常に多く含む。）
第Ⅰa層：明 灰 色 土 層　（しまりはあるが、粘性を欠く。浅間山系Ａ軽石を非常に多く含む。）
第Ⅰb層：明茶灰色土層　（しまりはあるが、粘性をかく。浅間山系Ａ軽石を多く含む。）
第Ⅰc層：明 灰 色 土 層　（しまりはあるが、粘性を欠く。浅間山系Ａ軽石を非常に多く含む。）
第Ⅱ層：暗茶褐色土層　（しまり、粘性が少ない。１㎜位のローム粒子・肌色粒子。）
第Ⅱ’層：明 灰 色 土 層　（しまりはないが、粘性が若干ある。若干の浅間山系Ａ軽石が混入する。）
第Ⅱ”層：明 灰 色 土 層　（しまりはないが、粘性が若干ある。浅間山系Ａ軽石が混入しない。）
第Ⅲa層：暗茶褐色土層　（しまり、粘性が少ない。１㎜位のローム粒子を若干含む。）
第Ⅲb層：黒　色　土　層　（Ｙ・Ｐを多く含み、軟質。）
第Ⅳ層：黒　色　土　層　（Ｙ・Ｐを非常に多く含み、硬質。）
第Ⅴ層：暗 黄 色 土 層　（黄色ローム漸移層。）
第１層：暗茶褐色土層　（しまりはないが、粘性はある。１㎜以下のローム粒子を若干含む。）
第２層：明茶褐色土層　（しまり、粘性がある。ローム粒子・炭化粒子・黒色土を含む。）
第３層：明茶褐色土層　（しまり、粘性がある。ローム粒子・黒色土を比較的多く含む。）
第４層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。第Ⅲa～Ⅳの風化土である。）
第５層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。第Ⅲa～Ⅳの風化土であるが、ローム粒子を多く含む。）
第６層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。第Ⅲa～Ⅳの風化土である。）
第７層：暗 褐 色 土 層　（しまりはないが、粘性はある。１～３㎜のローム粒子を多く含む。）
第８層：暗 褐 色 土 層　（しまりはないが、粘性はある。第７層に類似するが、ローム粒子は少ない。）
第９層：暗 褐 色 土 層　（しまりはないが、粘性はある。１～２㎜のローム粒子を多く含む。）
第10層：暗 褐 色 土 層　（しまり、粘性がある。１～２㎜のローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を若干含む。）
第11層：暗 褐 色 土 層　（しまり、粘性はあまりない。第Ⅴ層の風化土。）
第12層：暗 褐 色 土 層　（しまり、粘性はあまりない。ロームを斑状に含む。）
第13層：明 褐 色 土 層　（しまり、粘性が若干ある。１㎜以下のローム粒子を多く含む。）
第14層：暗 褐 色 土 層　（しまり、粘性が若干ある。第Ⅴ層の風化土で第11層よりロームが多い。）
第15層：暗 褐 色 土 層　（しまり、粘性が若干ある。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を若干含む。）
第16層：暗 褐 色 土 層　（しまり、粘性が若干ある。第15層に類似するが、色調がやや暗い。）
第17層：明 黄 色 土 層　（しまり、粘性が若干ある。１～５㎜のローム粒子及び焼土粒子を多く含む。）
第18層：暗 黄 色 土 層　（しまり、粘性が若干ある。ロームブロックを非常に多く含む。）
第19層：暗 褐 色 土 層　（しまり、粘性が若干ある。ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を若干含む。）
第20層：暗 黄 色 土 層　（しまり、粘性がある。１～５㎝のロームブロックを若干含む。）
第21層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。１～２㎜のローム粒子を若干含む。）
第22層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。１～３㎝のローム粒子を若干含む。）
第23層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。１～３㎝のローム粒子を多く含む。）
第24層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。第Ⅲa～Ⅳの風化土。）
第25層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。１～２㎜のローム粒子を若干含む。）
第26層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。ローム質土を斑状に含む。）
第27層：黒　色　土　層　（しまり、粘性がある。１～３㎝のローム粒子を多く含む。）
第28層：黒　色　土　層　（非常に強い粘性がある。１～２㎜のローム粒子を多く含む。）
第29層：黒　色　土　層　（非常に強い粘性がある。下層はシルト質と黒色有機質層が交互に沈殿している。）
第30層：明白色粘質土層（しまり、粘性非常に強い。白色粘質風化土。）

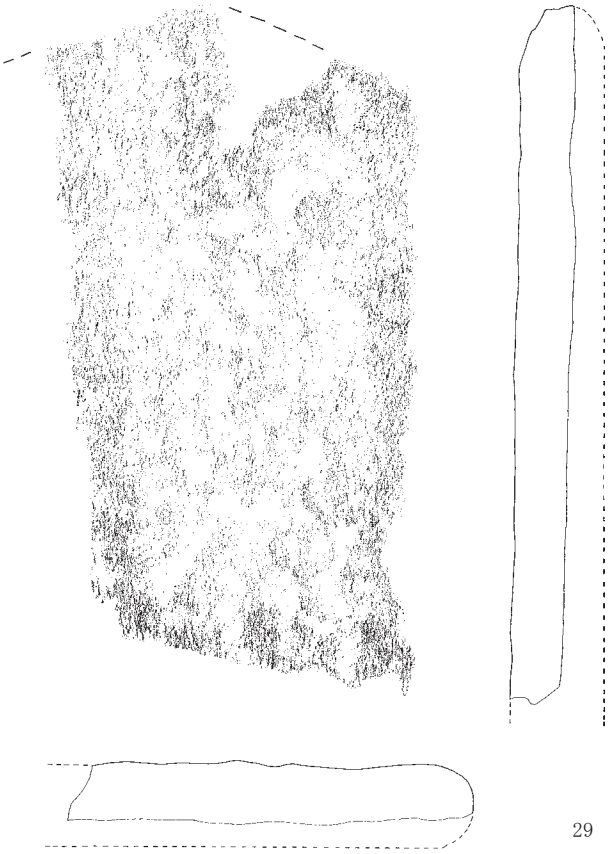


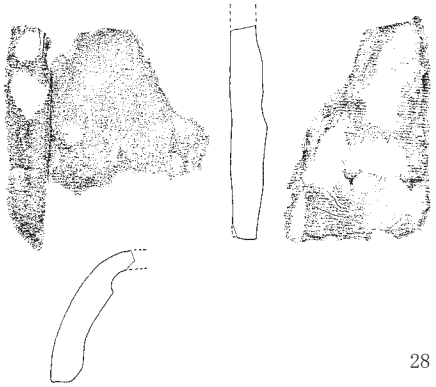
第10図　第１・２号溝跡出土遺物（１）

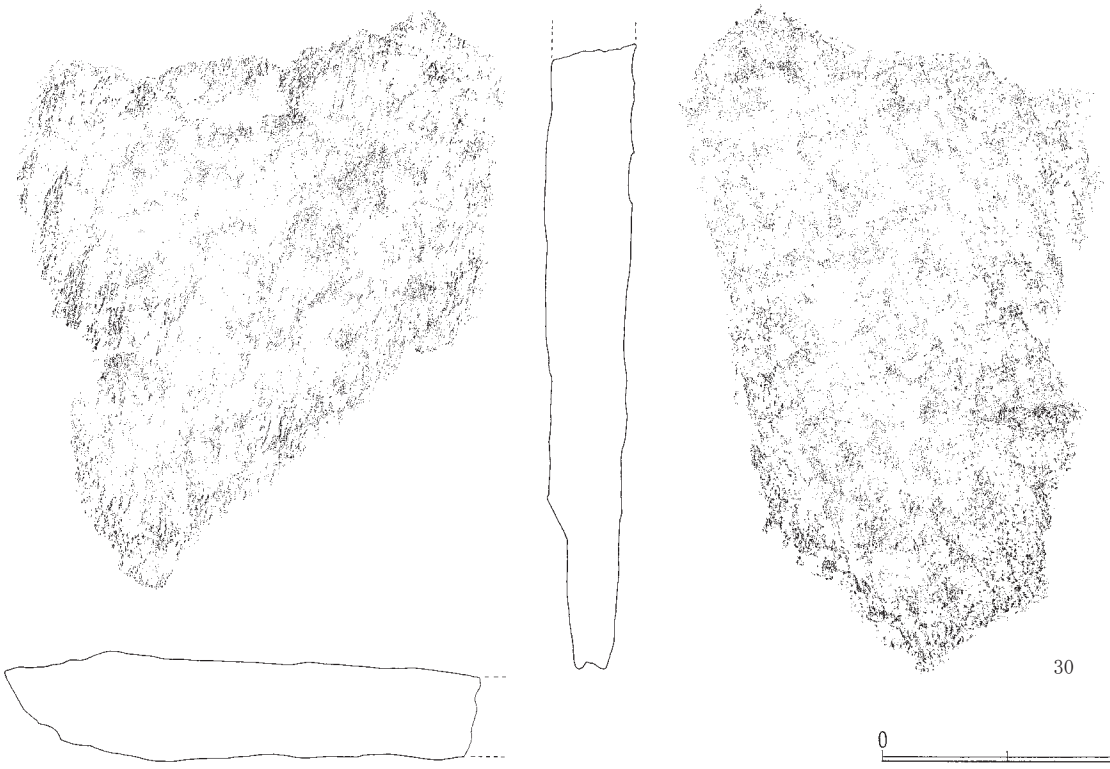


第11図　第１・２号溝跡出土遺物（２）







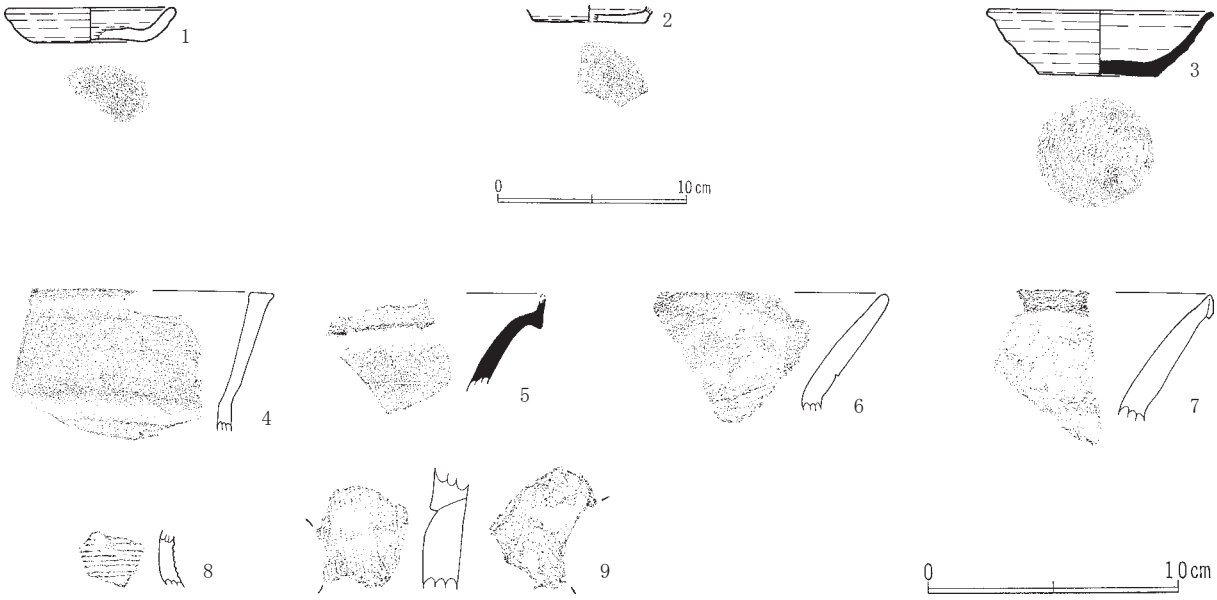


第12図　第１・２号溝跡出土遺物（３）

3	内 耳 鍋	A.口縁部径(27.6)。残存高14.1。B.粘土紐積み上げ。内耳貼り付け。C.口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篦ナデ、内面ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰褐色。 F.口縁部1/6破片。G.酸化煙焼成。胴部外面上半には指頭圧痕が顕著に見られる。胴部外面下半二次焼成顕著。H.第１・２号溝跡覆土上層。
4	片 口 鉢	A.口縁部径(28.0)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。 F.口縁部1/6破片。G.体部外面下半に指頭圧痕が顕著に見られる。H.第１・２号溝跡覆土上層。
5	大 皿	A.口縁部径(29.2)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－灰色。F.口縁部1/8破片。G.古瀬戸後期様式の卸目付大皿の模倣品。H.第１・２号溝跡覆土上層。
6	擂 鉢	A.底部径(10.0)。B.粘土紐積み上げ。C.体部内外面篦ナデ。底部内外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E.外－淡赤褐色、内－淡灰褐色。 F.底部1/4破片。G.体部外面に指頭圧痕が顕著に見られる。体部内面下半に擂目あり。H.第１・２号溝跡覆土上層。
7	大 皿	A.口縁部径(31.4)、器高9.0、底部径(10.6)。B.粘土紐積み上げ。足貼り付け。C.口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後、上半ナデ、下半ミガキ様の強いナデ付け。体部内面ヨコナデ。底部外面ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.底部1/4破片。G.古瀬戸後期様式の卸目付大皿の模倣品と考えられ、足は３足付くと思われる。H.第１・２号溝跡覆土上層。
8	かわらけ	A.口縁部径9.8、器高2.5、底部径6.5。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.3/4。G.器形はやや歪んでいる。H.第２号溝跡覆土下層。
9	かわらけ	A.口縁部径8.3、器高2.3、底部径6.0。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.完形。H.第２号溝跡底面付近。
10	かわらけ	A.口縁部径(8.1)、器高2.3、底部径5.7。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－茶褐色。F.1/3。H.第２号溝跡覆土中。
11	かわらけ	A.口縁部径7.9、器高2.3、底部径5.6。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.ほぼ完形。G.口唇部に煤付着。H.第２号溝跡覆土中。
12	かわらけ	A.口縁部径7.8、器高2.1、底部径4.8。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－黒褐色。F.完形。H.第１号溝跡覆土中。
13	かわらけ	A.口縁部径(7.7)、器高2.6、底部径4.4。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明橙褐色。F.2/3。G.底部外面に黒斑あり。H.第１・２号溝跡覆土中。
14	かわらけ	A.底部径(6.1)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.底部1/4破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
15	かわらけ	A.底部径6.0。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.底部のみ。H.第１・２号溝跡覆土上層。
16	坏	A.底部径5.2。B.粘土紐積み上げ。C.体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.体部下半1/3破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
17	内 耳 鍋	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。 F.口縁部破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
18	内 耳 鍋	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面ヨコナデ。D.白色粒。E.内外－黒灰色、肉－暗灰色。 F.口縁部破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
19	道 具 瓦	A.幅12.9、厚さ2.2。B.叩き。C.凹面糸切り後ナデ。凸面ナデ。上端面・両側面篦切り。D.白色粒。E.内外－暗灰色。肉－茶色。F.破片。H.第２号溝跡覆土中。
20	平 瓦	A.厚さ2.0。B.叩き。C.凹面糸切り後ナデ。凸面縄目叩き。D.白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
21	平 瓦	A.厚さ2.5。B.叩き。C.凹面糸切り後ナデ。凸面縄目叩き。上端面・側面篦切り後ナデ。D.白色粒。E.内外－暗灰色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
22	平 瓦	A.厚さ1.9。B.叩き。C.凹面糸切り。凸面縄目叩き。D.白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
23	平 瓦	A.厚さ2.5。B.叩き。C.凹面糸切り。凸面縄目叩き。側面篦切り後ナデ。D.白色粒。E.内外－淡灰褐色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
24	平 瓦	A.厚さ2.1。B.叩き。C.凹面ナデ。凸面縄目叩き。側面篦切り後ナデ。D.白色粒。E.内外－灰色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
25	平 瓦	A.厚さ2.0。B.叩き。C.凹面布目圧痕を残す。凸面縄目叩き。D.白色粒。E.内外－灰褐色。肉－茶色。F.破片。G.破片割口に煤付着。H.第１・２号溝跡覆土上層。
26	丸 瓦	A.厚さ2.1。B.叩き。C.凸面縄目叩きの後ナデ。凹面布目圧痕を残す。D.白色粒。E.内外－茶色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。

27	丸　　瓦	A.厚さ2.0～2.4。B.叩き。C.凸面ナデ。凹面布目圧痕を残す。側面篦切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－灰色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
28	丸　　瓦	A.厚さ1.2。B.叩き。C.凸面縄目叩きの後ナデ。凹面ナデ。端面・両側面篦切り後ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
29	板　　碑	残存長30.8、残存幅17.5。C.表面雑な研磨、裏面剥離。側面敲打による打ち欠き後雑な研磨を加える。D.緑泥片岩。F.上端部破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。
30	板　　碑	残存長29.1、残存幅19.8、厚さ3.8。C.表面不明瞭、裏面鑿によるケズリ。側面敲打による打ち欠き。D.緑泥片岩。F.基部破片。H.第１・２号溝跡覆土上層。

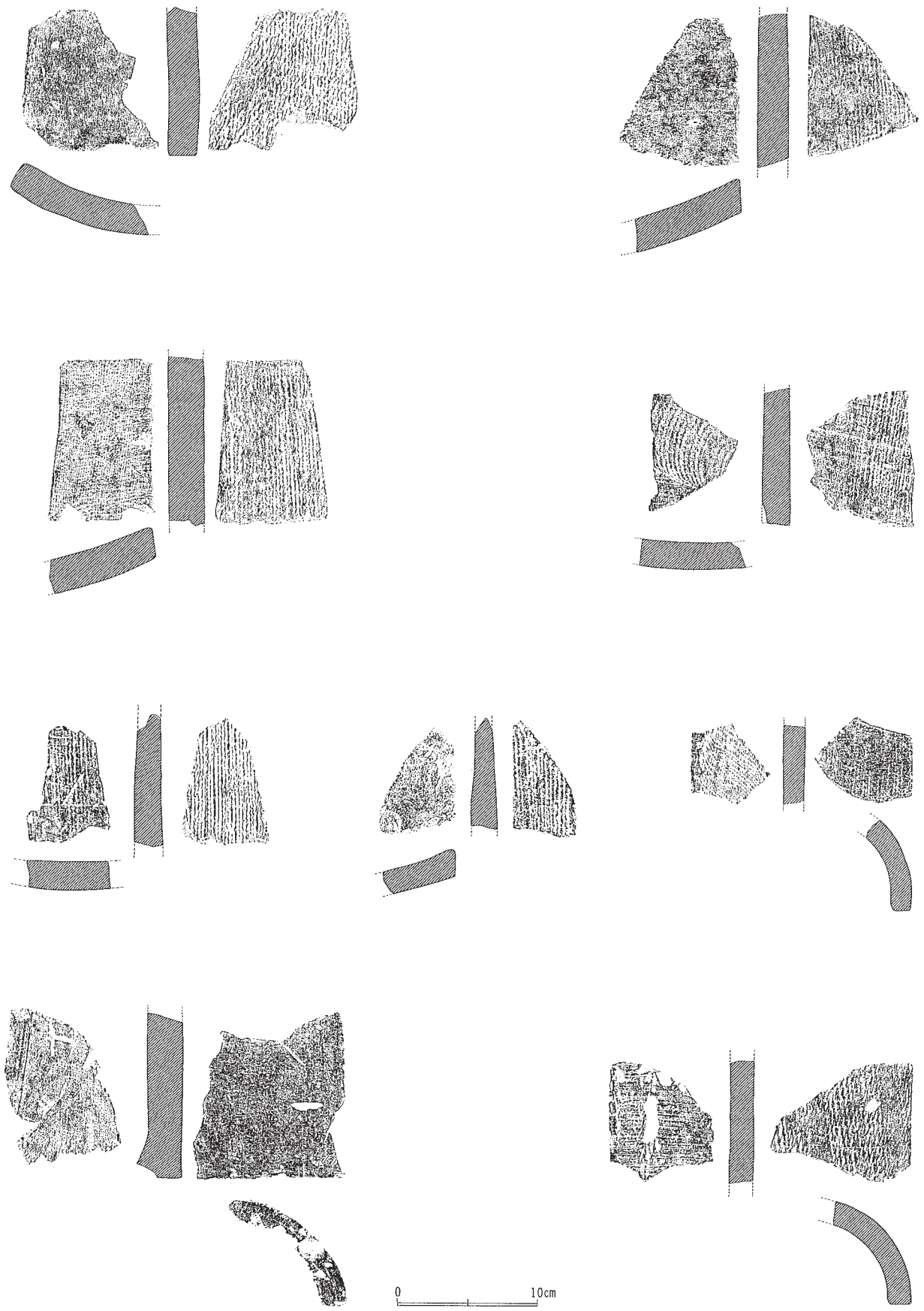
第４節　調査区内及びその他の出土遺物



第13図　調査区内及びその他の出土遺物

調査区内及びその他の出土遺物観察表

1	かわらけ	A.口縁部径(9.1)、器高1.8、底部径(6.1)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。胴部外面回転糸切り。D.黒色粒。E.内外－淡橙褐色。F.1/3破片。H.調査区内。
2	かわらけ	A.底部径(6.0)。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.白色粒。E.内外－淡茶褐色。F.底部1/4破片。H.調査区内。
3	須恵器坏	A.口縁部径12.0、器高3.5、底部径6.4。B.ロクロ成形。C.内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D.片岩粒、白色粒。E.内外－暗灰色。F.完形。G.環元煙焼成。末野産。H.調査区内。
4	内耳鍋	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面回転ナデ。D.赤色粒、白色粒。E.外－暗灰色、内－灰褐色。F.口縁部破片。H.調査区内。
5	須恵器壺	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部内外面回転ナデ。D.白色粒。E. 外－黒灰色、内－暗灰色。F.口縁部破片。G.環元煙焼成。H.第１・２号溝跡覆土中。
6	甕	B.粘土紐積み上げ。C.口唇部内外面ヨコナデ。口縁部外面ナデの後、頸部近くに連続する篦描斜行沈線文を施す。内面ナデ。D.片岩粒、白色粒。E. 外－淡橙褐色、内－暗橙褐色。F.口縁部破片。H.第１・２号溝跡覆土中。
7	甕	B.粘土紐積み上げ。C.幅狭複合口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内外面ナデ。D.片岩粒、赤色粒、白色粒。E. 内外－淡茶褐色。F.口縁部破片。G.樽式系。H.第１・２号溝跡覆土中。
8	甕	B.粘土紐積み上げ。C.頸部外面ナデの後７本歯以上の櫛描簾状文を施す。内面ミガキ。D.赤色粒、白色粒。E. 内外－淡茶褐色。F.頸部破片。G.樽式系。H.第１・２号溝跡覆土中。
9	円筒埴輪	B.粘土紐積み上げ。C.外面ハケ、内面ナデの後ハケ。D. 赤色粒、白色粒。E.内外－明茶褐色。F.破片。G.破片左側縁辺に透孔あり。H. 第１・２号溝跡覆土中。



第14図　真鏡寺境内採集瓦（恋河内1991より）

第Ⅴ章　ま　と　め　　-Ｇ地点出土の中世の遺物について-

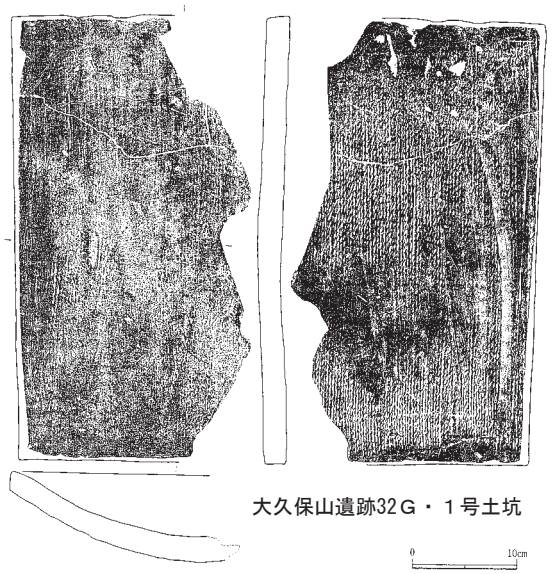
Ｇ地点で出土した中世の遺物は、比較的少量でそのほとんどは破片資料であるが、国産陶器の常滑窯製品の甕、在地産土器の内耳鍋・片口鉢・擂鉢・大皿・かわらけ、瓦、板碑などが見られる。これらの遺物は、大まかには中世前半と後半の２時期のものに別けられるが、中世前半に属するものは、第１・２号溝跡の覆土中に混入して出土した瓦の破片だけであり、出土遺物の大半を占める在地産土器は、すべて中世後半に属するものである。ここでは、Ｇ地点から出土した中世前半と後半のそれぞれ代表的な遺物である瓦と在地産土器の内耳鍋について、その年代や当地方における様相等、若干検討を加えてまとめとしたい。

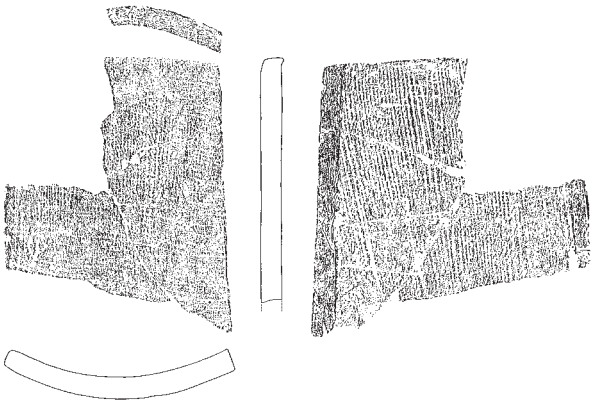
第１節　真鏡寺館跡出土の中世瓦について

Ｇ地点の調査で出土した瓦には、平瓦(第11図No20～No25)と丸瓦(第11図No26、第12図No27・28)と道具瓦(第11図No19)があり、平瓦と丸瓦は以前真鏡寺境内の本堂裏周辺から採集した瓦(第14図)と同じ作りのものである。平瓦は、凸面が縦方向の条線が細い縄目(縄蓆文)叩きの後に部分的に雑なナデを、凹面が糸切り離しかその後に雑なナデを施すもので、中には平面形がやや台形ぎみの形態になると思われるものもあるが、一応凸台一枚作りと考えられる(注１)。これらの中には、少数ながら凹面に布目圧痕を残すものも見られるが、それらは糸切りの瓦とは作業工程が異なる瓦と考えられ、あるいは軒平(宇)瓦の破片の可能性もあるのではないかと思われる(注２)。丸瓦は、凸面は縦方向の条線が細い縄目(縄蓆文)叩きの後にやや丁寧なナデ、凹面は布目圧痕をそのまま残すものが主体である。

児玉地方から出土した同種の縄目叩きの瓦で、現在のところ全体の形状や寸法がわかるものはない。平瓦は、本庄市大久保山遺跡(荒川1998)で全長43.0㎝の大形のものが、本庄市城の内遺跡(恋河内1997)で幅29.6㎝と幅22.1㎝の大小のものが出土しており、平瓦については概ね大小２種の大きさのものが認められる。丸瓦は、形状のわかるものはすべて玉縁式で、大久保山遺跡(荒川他1993)で幅11.2㎝、城の内遺跡で幅13.3㎝のものが出土している。

この凸面に縄目叩きの痕跡を残す平瓦や丸瓦は、古代瓦的な技法を色濃く残すものであるが、12世紀末～13世紀前葉頃とされる鎌倉永福寺の創建期(永福寺Ⅰ期)の瓦の中に同様の技法のものが認められる(服部・余語1990、小林1992、石川1996、原1997)。当地域でも、本庄市城の内遺跡Ｃ地点(恋河内1997)の第１号門跡前庭部から、同種の比較的多くの縄目叩きの瓦片とともに、12世紀末～13世紀初頭頃の山茶碗窯系片口鉢や13世紀前半とされるロクロ製や非ロクロ製のかわらけ(荒川1998)が出土しており、伴出した遺物から時期をある程度推測できる例がある。13世紀前半代の永福寺Ⅱ期にあたる寛元・宝治年間(1244年～1248年)の永福寺修造瓦を生産した美里町水殿瓦窯跡(丸山1990)の第１号窯跡出土品(細村喜夫氏所有品)の中に、同様の凸面縄目叩きの瓦片が１片見られるのが気になるが、当地域におけるこの時期の平瓦は、おそらく連続山形文や連続斜格子文などの文様叩きのものが主体になると思われ、13世紀後半・末～14世紀代の第Ⅲ期(服部・余語1990、石川1996、原1997)に盛行する幅広の陽刻剣頭文軒平瓦を出土する当地方の遺跡では、それに伴う平瓦や丸瓦はナデ調整が主体であることから、本遺跡出土のような縄目叩きの瓦は、すでに多くの人が指摘されているように(服部・余語1990、石川1996、原1997)、ほぼ永福寺Ⅰ期の時期に限定してよいと考えられる。そして、

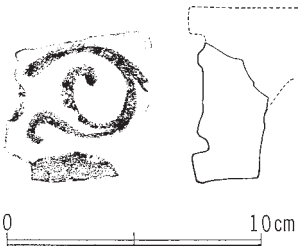




第15図　児玉地方の中世縄目叩き瓦

この当地域の縄目叩きの瓦に伴う軒瓦は、永福寺Ｉ期の軒瓦で当地域に集中して分布する傾向が見られる永福寺式軒瓦（八葉複弁蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦）の可能性が高いのではないかと思われる（注３）。この永福寺式軒瓦の東国における分布については、「出土地のほとんどが鎌倉時代初期に鎌倉幕府ないしは源頼朝とかかわりのあった有力御家人の本貫地や彼ら一族の菩提寺的な性格を有する寺院のあった地に該当している」と言われており（小林2001）、その背景としては「頼朝による永福寺建立を契機として、武士階層にも広がりを見せた氏寺（阿弥陀堂建築）の創建という機運の流れにつながるもの」（原1997）と理解されている。

児玉地方で永福寺式軒瓦を出土した遺跡は、現在のところ本遺跡（鈴木1991）の他に大久保山遺跡浅見山Ｉ地区（本庄市1986）・本庄市羽根倉南遺跡（第16図）・神川町元大師跡（小林1989）、上里町堂裏遺跡（長谷川・丸山・外尾1992）などがあり、同時期の縄目叩きの瓦を出土した遺跡は、本遺跡の他に本庄市東本庄遺跡（町田他2004）・大久保山遺跡・城の内遺跡（鈴木・西口1981、恋河内1997）・日延遺跡（恋河内1999）・塩谷下大塚遺跡（徳山他2000）や、美里町水殿瓦窯跡・志渡川古墳（長滝2005）・南十条遺跡（長滝2006）などがある。これらの遺跡の多くは、古代児玉郡地域の中心的生産基盤である女堀川流域を中心に分布しており、古代末～中世初期には武蔵



第16図　羽根倉南遺跡出土永福寺式軒平瓦

七党の児玉党諸氏の本貫地が多く所在する児玉党の中心的勢力域と考えられる地域である(注４)。

このように、児玉地方に12世紀末～13世紀前半の縄目叩きの瓦や永福寺式軒瓦が多く出土する要因には、この時期に見られる鎌倉幕府の有力御家人による造寺活動にならった当地方の児玉党・丹党・猪俣党などの御家人諸氏が、地元に氏寺的性格の寺院や堂を積極的に建立していたことが考えられる。しかしながら、このような当時の社会的趨勢とは別に、13世紀前半の永福寺Ⅱ期には永福寺の修造瓦を鎌倉から遠く離れた当地の水殿瓦窯跡で生産していたことを考えると、すでにこの永福寺Ⅰ期の段階から当地と永福寺とは密接な関係にあったことが窺える。そして、その具体的な要因を考えるには、これまでの鎌倉中心の視点ではなく、もう少し在地的な視点から当地方と永福寺の関係を見直していく必要があるのではないかと思われる。

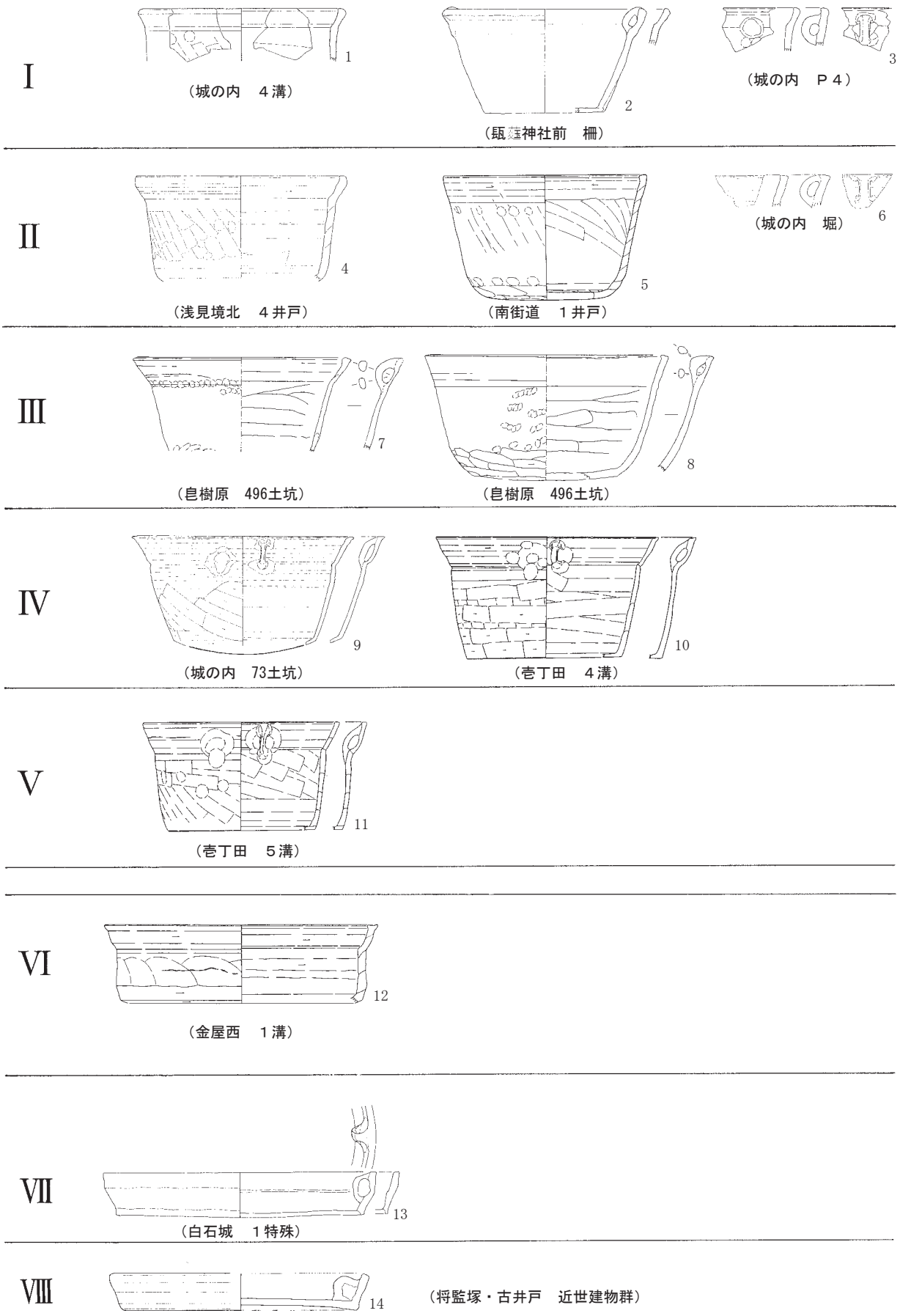
第２節　真鏡寺館跡出土の内耳鍋について

本遺跡が所在する児玉地方の内耳鍋の様相は、その地理的位置からして、北武蔵や上野地方（木津1989、浅野1991、服部1997・1998）とほとんど同じである。近年の調査の進展に伴って、当地方の資料も徐々に増加しつつあるが、器形の全容が分かるものはあまりなく、特に底部形態が完全に分かるものは非常に少ない(注５)。また、発掘調査における近世の遺構・遺物に対する注目度が未だ低いこともあって、内耳鍋の消滅期にあたる近世の資料も十分とは言えない。このような資料的状況ではあるが、一応現在までの資料により、当地方の内耳鍋の出現から消滅までの様相を、諸氏による研究を参考にして、Ⅰ～Ⅵ期に区分して配列したのが第17図である。当地方の内耳鍋の器形変化の指向性については、口縁部の長大化、底部の平底化、胴部の垂直化と減高(浅底)化などがすでに指摘されているが、以下各期の具体的な特徴について述べてみたい。

＜Ⅰ期＞　口縁部が短く内面が窪み、ヨコナデを１段施すものである。当地域では該期の資料は少なく、器形の全容が分かるのは瓰薩神社前遺跡例(第17図No２)しかないが、毛呂山町堂山下遺跡(宮瀧1991)や坂戸市金井遺跡(赤熊1994)などを見ると、この段階にはすでに口縁部が外傾するものと外傾しないものの二者が存在するようである。内耳の形態は、側面観は円形に近く、正面観は幅が太く橋状である。底部形態の分かるものは少ないが、平底(第17図No２)と丸底形態のものがある。器肉は、全体的に厚めである。焼成は、瓦質・須恵質の環元煙焼成のものが主体である。

＜Ⅱ期＞　Ⅰ期より口縁部が長くなり、ヨコナデを２段施すものである。口縁部は、外傾するもの(第17図No４)と外傾しないもの(第17図No５)の二者がある。内耳の形態は、Ⅰ期とほぼ同じである。底部は、胴部と底部の境が緩やかで丸みを持つ平底形態のもの(第17図No５)が分かるだけであるが、おそらく丸底形態も存在すると思われる。器肉は、全体的に厚めである。焼成は、瓦質・須恵質の環元煙焼成のものが主体である。

＜Ⅲ期＞　Ⅱ期より口縁部がさらに長くなり、ヨコナデを２～３段施すものである。口縁部は、Ⅱ期と同じく、外傾するもの(第17図No７)と外傾しないもの(第17図No８)の二者がある。内耳の形態は、側面観は口縁部の伸長に合わせて若干扁平ぎみになるが、次期に比べてまだ高さがある。正面観はⅡ期までと同じく太い。底部は、平底と丸底形態のものが存在すると思われるが、胴部と底部の境はⅡ期と同じく緩やかで丸みをもつ形態のものが主体である。器肉は、Ⅱ期に比べると全体的に薄めになる。焼成は、瓦質の環元煙焼成のものを主に、若干酸化煙焼成ぎみの焼成不良のようなものも見



第17図　児玉地方における内耳鍋の様相

られるようになる。

＜Ⅳ期＞　口縁部の伸長が最高に達し、細かいヨコナデを３段以上施すものである。鉄鍋の形態模倣度が最も高く、口唇部を外側に短く突出させて、鉄鍋の鋳造における口唇部のはみ出しまで模倣しているのが特徴的である。内耳の形態は、側面観は口縁部の伸長に伴って上下に引っ張られるように楕円形に扁平化し、正面観は細く紐状である。底部の形態は、丸底(第17図No９)と平底(第17図No10)があるが、胴部と底部の境はこれまでの緩やかな丸みをもった形態から、明確な稜をもった形態になる。器肉は、薄く比較的均一である。焼成は、瓦質の環元煙焼成のものと、赤褐色や茶褐色を呈するやや軟質の酸化煙焼成のものがある。該期の大きな特徴は、これまで口縁部形態にややバラエティーのあった器形が、ほぼ画一的になることであろう。

＜Ｖ期＞　口縁部の形態は、前段階とほぼ同じであるが、口唇部外側の突出がなく、口唇部や内面の口縁部と胴部の境の段などにシャープさがなくなり、作りにやや退化的傾向が認められるものが多くなる。内耳の形態は、前段階と同じ紐状である。胴部は、前段階よりも立ち上がりの傾斜が急になり、垂直に近くなる。底部の形態は、胴部との境に明確な稜をもつ平底で、丸底は見られなくなる。器肉は、前段階と同じく薄く比較的均一である。焼成は、やや軟質の酸化煙焼成ぎみで、焼きのあまいものが多くなる。

このⅣ・Ｖ期が、当地域の深鍋形内耳鍋のピークで、主に館関係の遺跡から多量に出土する傾向が見られる。Ⅵ期以降は、当地域では良好な資料が少なく、具体的な変遷を示すことができないが(注６)、隣接する上野地方の様相からすると、胴部の高さが低くなるとともに口径が大きくなって、浅鍋形内耳鍋に徐々に移行するものと考えられる。そしてⅦ期には、内耳鍋の製作技法を継承したいわゆる焙烙形内耳土器(第17図No13)が新器種として出現する。

この各期の実年代については、浅野氏や服部氏の年代観(浅野1991、服部1997)を参考にすると、Ⅰ期が15世紀初頭、Ⅲ期が15世紀中頃、Ｖ期が16世紀初頭、Ⅷ期が17世紀前半に相当しよう。

今回のＧ地点の調査では、第３～５号土坑や第１・２号溝跡の覆土中から、内耳鍋の破片がいくつか出土している。これらの内耳鍋の時期は、当地方の内耳鍋の様相と比較すると、第３～５号土坑出土No１と第１・２号溝跡出土No１・２がⅡ期、第１・２号溝跡出土No３がⅢ期、調査区内出土No４がⅣ期、第１・２号溝跡出土No17・18がおそらくＶ期に該当するものと考えられ、遺物の出土量が少ないながら、比較的時間幅をもつ遺物群であることがわかる。

注

（1）　平瓦の凹凸両面に糸切り痕が見られ、その後凸面側に縄目叩きを施していることから、柱状粘土塊から糸切りによって一枚ずつ切り離し後、成形台は凸台を使用していると考えられる。しかしながら、凹面に雑なナデ調整を加えているものがあることから、調整段階に凹台を使用している可能性もあろう。

（2）　時期は異なるが、城の内遺跡(恋河内1997)出土のⅡ群瓦である凸面に大形複線「Ｘ」字状斜格子文の叩きを施した平瓦の凹面はナデ調整が主体であるが、それに伴う軒平瓦(連珠文)の凹面は、すべて布目圧痕を残している。

（3）　当地域の該期の瓦を葺いた寺院や堂が、すべて軒瓦を備えていたとは考えられないが、この縄目叩き瓦と永福寺式軒瓦は、単に同時期の瓦と言うだけでなく、児玉地方や周辺地域ではともに出土あるいは採集される例も多く、かなり密接な関係にあると思われる。

（4）　隣接する上里町は、古代の加美郡に属し、中世は主に武蔵七党の丹党の勢力域である。ちなみに堂裏遺跡は、丹

党安保氏の菩提所と推測される大御堂と関係する遺跡である。美里町は、古代の那珂郡に属し、中世は主に武蔵七党の猪俣党の勢力域である。

（５）　内耳鍋は、日常的に使用される煮炊具と考えられるため、破損後に廃棄されたものが館や屋敷の溝や井戸から破片になって出土する場合がほとんどであるが、それらの破片は底部と胴部の境の屈曲部から底部側の１㎝～２㎝内側で丸く割れているものが多く、完形に近いものでもその部位で底部が円形に剥落しているものがしばしば見られる。金屋西遺跡(恋河内2003)の土壙墓(ＳＫ66)に副葬された内耳鍋も、底部が円形に抜けていることからすると、この内耳鍋に見られる底部の円形剥落は、おそらく内耳鍋の廃棄に伴う儀礼的行為として、人為的に施された可能性があるのではないかと思われる。

（６）　当地方のＶ期とⅥ期の間には、相互の型式的距離から見て、おそらく１～２時期の間があるものと考えられる。

＜参考文献＞

赤熊　浩一　(1994)『金井遺跡Ｂ区』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第146集

浅野　晴樹　(1991)「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集

荒川　正夫　(1998)「中世前期の館跡と出土遺物」『大久保山Ⅵ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告６　早稲田大学

荒川　正夫　他　(1993)『大久保山Ⅱ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告２　早稲田大学

石川　安司　(1996)「比企地方の中世瓦(２)(３)」『比企丘陵』第２号　比企丘陵文化研究会

(1998)「東松山市西浦遺跡出土の中世瓦」『比企丘陵』第３・４号　比企丘陵文化研究会

井上　尚明　(1986)『将監塚・古井戸Ⅰ　―古墳・歴史時代編Ⅰ―』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集

大屋　道則　(1988)『真鏡寺後遺跡Ⅱ』　児玉町文化財調査報告書第８集

金子　彰男　(1998)『中道遺跡第15・21・23・25地点　中北原遺跡第２・４地点　北下原遺跡』　神川町教育委員会文化財調査報告第17集

木津　博明　(1989)「上野国に於ける在地生産土器に就いて」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　日本中世土器研究会

栗岡眞理子　(1996)「神川町伝元大師跡の出土遺物について」『研究紀要』第18号　埼玉県立歴史資料館

栗山欣也・今井　宏　(1988)「児玉郡市の城館跡」『埼玉県の中世城館跡』　埼玉県教育委員会

恋河内昭彦　(1991)『真鏡寺後遺跡Ⅲ』　児玉町文化財調査報告書第14集

(1996)『辻堂遺跡Ⅰ』　児玉町文化財調査報告書第19集

(1996)『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』　児玉町文化財調査報告書第20集

(1997)『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集

(1998)『向田Ａ・向田Ｂ・壱丁田遺跡』　児玉町文化財調査報告書第27集

(1999)『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』　児玉町文化財調査報告書第31集

(2003)『金屋西遺跡（Ａ・Ｂ地点の調査）』　児玉町遺跡調査会報告書第13集

(2004)『女池遺跡Ⅱ（Ａ地点の調査）』　児玉町遺跡調査会報告書第16集

(2005)『後張遺跡Ⅲ－Ｃ地点の調査－』　児玉町遺跡調査会報告書第20集

小林　康幸　(1989)「関東地方における中世瓦の一様相」『神奈川考古』第25号　神奈川考古同人会

(1992)「鎌倉永福寺跡出土瓦の諸問題」『立正考古』第31号　立正考古学研究会

(2001)「埼玉県下に分布する永福寺式軒瓦について」『埼玉考古』第36号　埼玉考古学会

埼玉県教育委員会　(1968)『埼玉の城館跡』　国書刊行会

篠崎　潔　(1995)『真下境西・反り町・八荒神北・八荒神南遺跡』　神川町教育委員会文化財調査報告第12集

篠崎　潔・平田重之　(1989)『皂樹原・檜下遺跡Ⅰ(阿保境の館跡)－中世編－』　皂樹原・檜下遺跡調査会報告書第１集

鈴木　徳雄　(1981)『金屋遺跡群』　児玉町文化財調査報告書第２集

(1987)『真鏡寺後遺跡Ⅰ』　児玉町文化財調査報告書第７集

(1991)「塩谷氏館跡と児玉党の形成」『真鏡寺後遺跡Ⅲ』　児玉町文化財調査報告書第14集

（1995）「古代児玉郡の土地利用と方形館の成立」『堀向・藤塚Ａ・柿島・内手Ｂ・Ｃ・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第18集
鈴木徳雄・西口正純（1981）『深町・城の内遺跡』　深町遺跡調査会
千々和　実　（1974）「板碑」『日本考古学の現状と課題』　吉川弘文館
徳山　寿樹　他　（2000）『塩谷下大塚遺跡－Ｄ地点の調査－』　児玉町遺跡調査会報告書第10集
徳山　寿樹　（1992）「児玉町田端中原遺跡の調査」『第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨』　埼玉県考古学会他
中村　倉司　他　（1979）『白石城』　埼玉県遺跡調査会報告第36集
（1980）『瓰薩神社前遺跡・一本松古墳』　埼玉県遺跡調査会報告第39集
長滝　歳康　（2005）『南志渡川遺跡・志渡川古墳・志渡川遺跡』　美里町遺跡発掘調査報告書第16集
（2006）『北貝戸遺跡・南十条遺跡』　美里町遺跡発掘調査報告書第17集
野口　泰宣　（1991）「児玉党塩谷氏と塩谷郷」『真鏡寺後遺跡Ⅲ』　児玉町文化財調査報告書第14集
長谷川勇・丸山陽一・外尾常人（1992）「児玉郡における中世の概要」『児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要　―平成３年度後期文化財担当者会議資料―』埼玉県教育局文化財保護課　児玉郡市文化財担当者会
服部　敬史　（1997）「内耳土鍋の研究（上）」『土曜考古』第21号　土曜考古学研究会
（1998）「内耳土鍋の研究（下）」『土曜考古』第22号　土曜考古学研究会
服部実喜・余語琢磨（1990）「称名寺旧境内出土の中世瓦」『物質文化』53号　物質文化研究会
原　廣志　（1997）「東国出土の中世瓦」『浄土庭園と寺院　―永福寺創建800年記念シンポジウム記録集―』　鎌倉市教育委員会
本　庄　市　（1986）『本庄市史』通史編Ⅰ
町田奈緒子　他　（2004）『東本庄』　本庄市埋蔵文化財調査報告第29集
丸山　陽一　（1990）『国指定史跡　水殿瓦窯跡試掘調査報告』　美里町遺跡発掘調査報告書第６集
峰岸　純夫　（1978）「武蔵国児玉郡枝松名について」『埼玉民衆史研究』第４号
宮　　昌之　（1992）「児玉地区の寺院跡」『埼玉の中世寺院跡』　埼玉県教育委員会
宮瀧　交二　（1991）『堂山下遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第99集
両角　まり　（1996）「内耳鍋から焙烙へ」『考古学研究』通巻168号　考古学研究会

写　真　図　版

図版 1

真鏡寺後遺跡遠景

真鏡寺館跡（1988年頃）

図版２

真鏡寺後遺跡Ｇ地点調査区全景（北から）

真鏡寺後遺跡Ｇ地点調査区全景（東から）

図版３

第53号住居跡（南から）

第53号住居跡（西から）

図版４

第３～５号土坑

第３～５号土坑遺物出土状態

図版５

第３～５号土坑覆土堆積状態（北から）

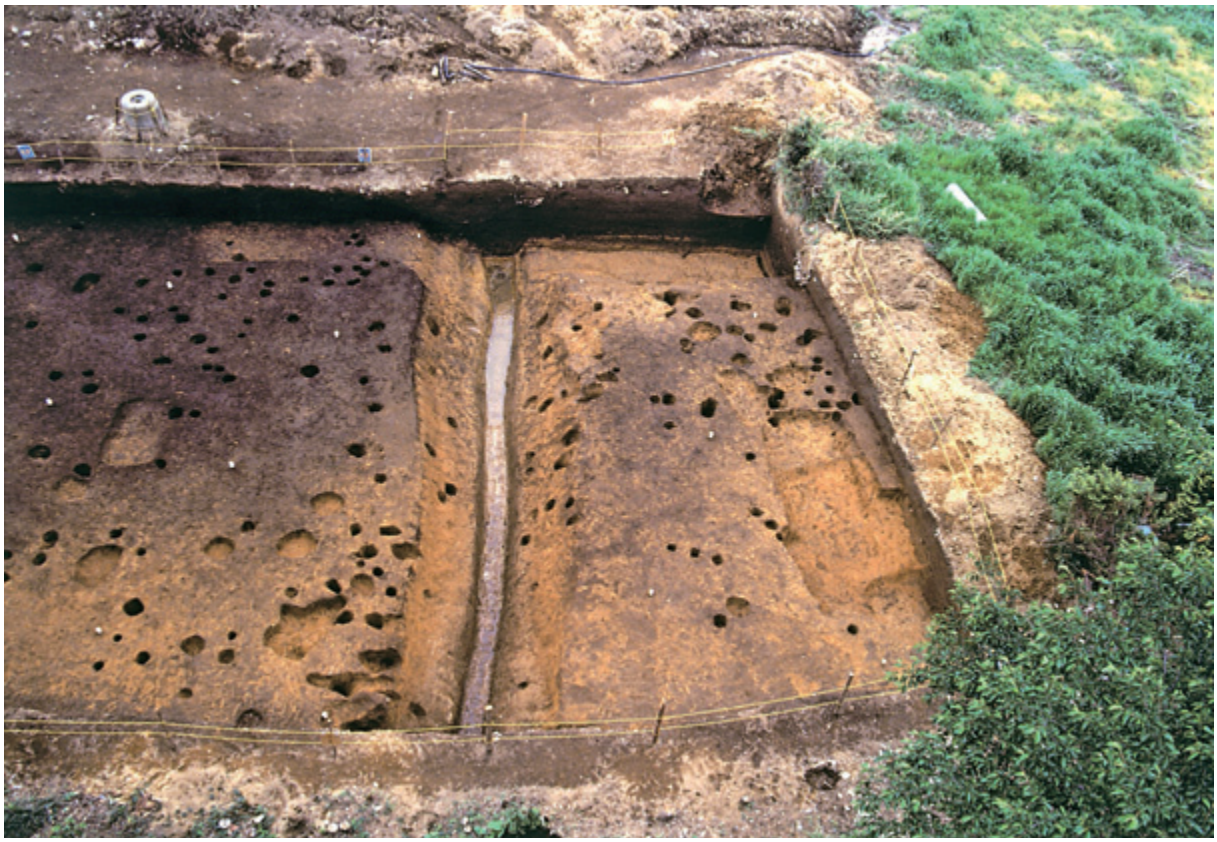
第３～５号土坑覆土堆積状態（西から）

図版６

第６号土坑

第６号土坑遺物出土状態

図版７

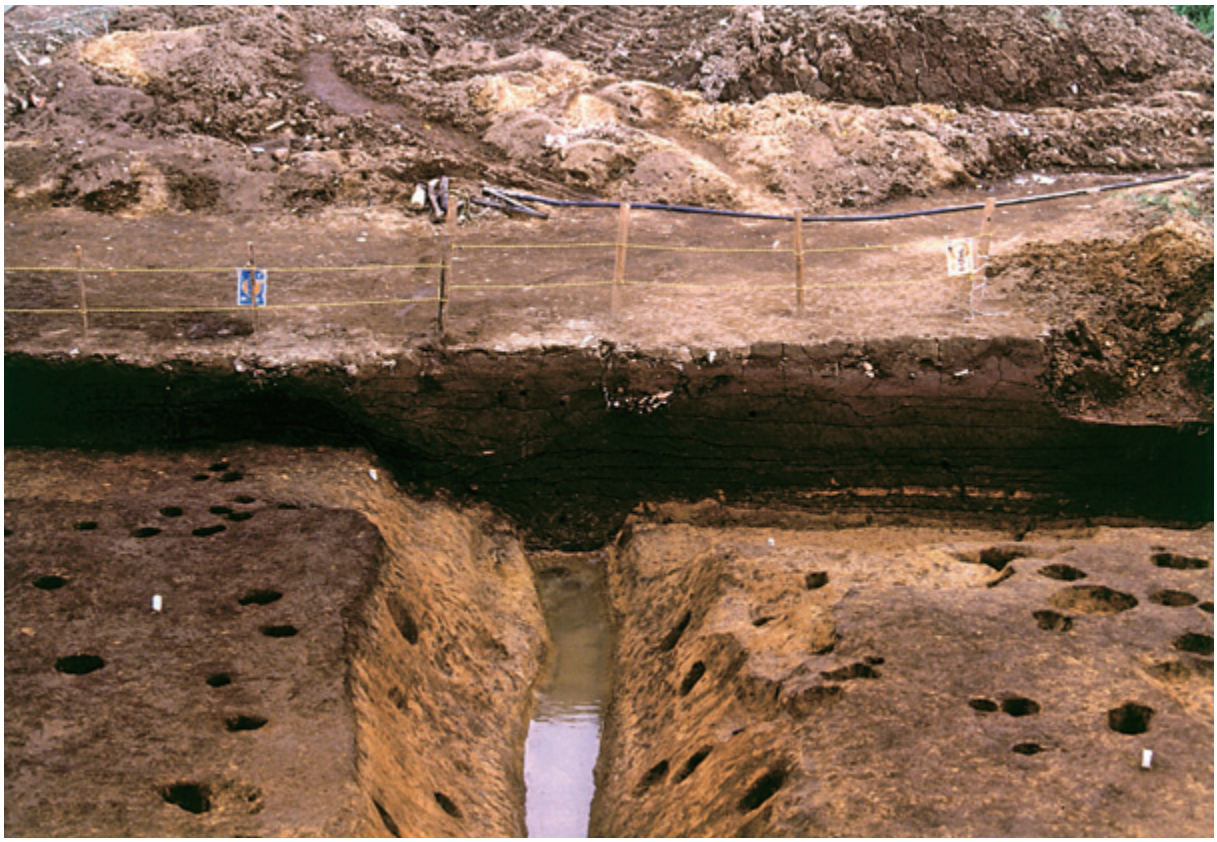


第１号溝跡

第１号溝跡（北から）

第１号溝跡（南から）

図版８



第１号溝跡調査区南側壁面覆土堆積状態

第１号溝跡調査区北側壁面覆土堆積状態

図版９

第１号溝跡遺物出土状態（１）

第１号溝跡遺物出土状態（２）

図版 10

第１号溝跡遺物出土状態（３）

第１号溝跡遺物出土状態（４）

図版 11

第２号溝跡（北から）

第２号溝跡（南から）

図版 12

第２号溝跡遺物出土状態（１）

第２号溝跡遺物出土状態（２）

図版 13

第53号住居跡出土土器

土坑出土土器

第１・２号溝跡出土土器（１）

第１・２号溝跡出土土器（２）

図版 15

第１・２号溝跡出土瓦

図版 16

第１・２号溝跡出土板碑

調査区内及びその他の出土遺物

報　告　書　抄　録

フリガナ	シンキョウジウシロイセキⅣ		
書名	真鏡寺後遺跡Ⅳ		
副書名	Ｇ地点の調査		
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書	巻次	第24集
編著者	恋河内昭彦		
編集機関	本庄市遺跡調査会		
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号　TEL　0495-25-1185		
発行日	西暦2009年（平成21年）５月25日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査 面積	調査 原因
真鏡寺後遺跡 （Ｇ地点）	本庄市児玉町 塩谷85-2他	112119	54-107	36°11′27″	137°46′11″	19920406 ～19920520	408 ㎡	宅地 造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真鏡寺後遺跡 （Ｇ地点）		古墳時代		土師器、埴輪片	
	集落	平安時代	竪穴住居１	土師器甕、須恵器坏	
	館	中世	堀２、土坑３	常滑窯系甕、内耳鍋、片口鉢、かわらけ、瓦、板碑	
		近世	土坑１	かわらけ	
		不明	土坑２		

本庄市遺跡調査会報告書第24集

真 鏡 寺 後 遺 跡 Ⅳ

−Ｇ地点（真鏡寺館跡）の調査−

平成21年５月25日　印刷
平成21年５月25日　発行

発行／本庄市遺跡調査会

埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号
（本庄市教育委員会文化財保護課内）

印刷／山進社印刷株式会社